

若返り法と男女両性の
人工的变化

国立国会図書館



始



若返法と男女の人工的變化。

トI 17-11

若返り法と
男女の人工的變化
两性

回春堂醫院長 山尾清實述

60-715

若返り法と男女の人工的變化

緒言

何人も青春二八若き血の長へに凋れざらん事を希はぬものがあるであろうか、
 秋の何時迄も迫り來ることのなきを祈らぬものがあるであろうか、力の及ぶ
 手段のあらん限りを盡しても所詮老の波の刻一刻と吾人の身の上に迫り來るを
 防は不可能なのであろうか、人は幾度か不老長壽の法を求めて而かも幾度か失
 望に終つた。

壯年血氣の時代は生命とか長壽を希ふとか謂ふ問題は更に念頭に浮ばず別段意に介
 する者ではないが、然し齡己に四十を越し二三年の後に至り、先づ眼力衰へて細事
 の作業に眼鏡を要し精魂容易に盡き、起居動作に懶うく記憶力衰へ、年一年凋落の

10 10.20
 内交

警報に接するに及び、壯年の當時を顧みて其頃の元氣を追想し、轉た老境を啣つは吾れ人共に人情の然らしむる處である。

吾人は穴勘無爲に長壽せん事を欲するのみでわなない、人間としての活き甲斐ある生活望むものであつて如何に長壽すればとて、眼は盲目に均しく、耳は聾し齒は悉く抜けて食に味なく、手足自由ならず、腰は屈し精神も亦老耄せば生きて何の樂しみか有る可きぞ、吾人は如何に年老いたるとも精力充實し旺盛なる活動をなし得て勇猛不撓の銳氣が横溢せんことを希ふのである。

吾人の如く齡既に五十に近く老境に在るものはまだしもなれど、現今の如く三十前後にして恰も老衰者に均しき神經衰弱者或は生殖器無力者の年々増加するは誠に慨嘆に堪へざる處で余が過去一年間に於いて若返り手術を行ひし患者一千名中三十歳以下の人が其半數を占めて居ると謂ふ事實は讀者の意外とする處なるべしと信ず。

前に述ぶるが如く數千年來人は幾度か不老長壽の法を講じ而かも其度毎に失敗を重

ねて落膽を繰り返し何如に科學の進歩發達せる今日と雖も人爲の如何ともする能はざるものなりと遂に不老長壽の法に斷念し止むなく厭や／＼ながら死の道に歩み運びつゝあるのであるが、この際假りき造物者の壘を磨する如き救世主現出し、生物の定命を延長せしめ、或は老衰者の精氣活力を恢復して再び數年若くは十數年前の状態に若返らせ又は生殖器無力者をして能力者たらしめ得たりとせんか、世界開闢以來の恩惠者として歴史のあらん限り永遠に感謝すべき人であらねばならぬ。

天來の福音

この救世主と稱す可きは獨逸の碩學者でウイナ大學生理學教授兼生物學研究所長スタインナツハ博士であつて。氏は實に一千九百年から一千九百二十年に至る十年間一日の如く若返り法に就いて眞面目に熱心に研究せられ慎重の上にも慎重の態度を以て發表されたのである。東大醫科の權威たる生理學教授永井博士は左の如く評せられ

て居る。

發見者スタインナツハ氏が現在獨逸に於ける學界の地位より又その學歴よりして或は其發表の論旨整然とし學理的に充分傾聴せしめる權威があるのみならず前後十年間試みた實驗奏効の詳細なる報告等に見て何れの點よりするも右に對しては決して疑義を狭む餘地はないものである云々

ス氏若返り法の發表せらるゝや獨逸埃太利は謂ふに及ばず瑞西、匈牙利、亞米利加英吉利等の各新聞誌誌は一齊に教授の偉業を紹介し非常に賞讃の辭で紙上を埋めて居る。のみならず寄席や、酒場や、電車内の話題となつてスタインナツハ教授の名は八方に擴がつた。内閣の評判が悪くなるにスタインナツハ教授に頼んで手術をして貰はねばならぬと新聞が無駄口を利くまでに教授の名が高まつた。

十月八日ウインナ市のノイエ フライエ ブレッツセ紙上掲載の記事を左に抄録
ドクトル、マグヌスヒルシュフェルト氏は、スタインナツハ教授の業績に就いて若

返り法及性の人工的變化と云ふ小冊子を出して居る人であるが過般獨逸ミュンヘン大學外科教室でスタインナツハ氏の若返り法に就いてと題する講演をした。ところが氏の演説の言葉のうちに聴衆の反感を招いた事が有つて形勢頗る不穩になつたので氏はそつと場外へ逃出さうとしたが果さずして群集からしたたかに撲られ五十二歳を最後として若返り法の歸依者は茲に敢果なき最後を遂げた兎に角く學術上のことから斯ふ云ふ出來事を惹起したのは珍らしいことで又以て若返り法の人氣を察すべきである。

◎若返り研究所は國庫で建設せよ

獨逸埃太利では人命を延長させるといふ様な大問題は當然國庫で支出すべき性質のものであると云ふ議論が八釜しくなつた。

スタインナツハ氏は昔流の實驗生物學研究所に代ふるに特別の施設ある研究所建設を埃國々會に提出して居るが何分にも埃國も獨逸も今や財政窮乏の極に達し斯かゝる

研究所の施設などは思ひも寄らぬことで止むを得ずスタインナツハ氏は外國からの援助を受けることを希望して居るス氏は憤慨の餘り先週獨逸國會議員連の集會席上に爲した獨逸學會の現狀に就て悲憤痛恨の演説をして深甚の印象を一般に與へた會では世界に覇を唱へた獨逸學會が財政不足の爲如何に困窮に陥つて居るかを有力に物語るものである。

ホルモンとは如何なる者なるか

◎外分泌と内分泌の區別

抑も人類及び動物の老衰するのは何故であるか此の問題から解決して行かなければ學問上から老衰を豫防し又は老衰した人を若返らせることは到底不可能である、而して此の老衰の原因を理解するには先づ内分泌（ホルモン作用）を得せねばならぬ。ホルモンの意味を理解せずして、如何に努力するも老衰の原因を知ることができない従つて若返り法を會得することは斷じて能き得ないのである。而して此の内分泌（即ちホルモン作用）を知るには之れと反對の外分泌作用なるものを知つて置かなくてはならぬ。

◎外分泌

普通單に分泌と稱するのは此外分泌を意味して居ることであつて其の作用は何人にも知られて居る。即ち人類或は他の動物の体内には唾液を製造する泉の如き臓器がある、この臓器を腺と名付けて居る。

此の腺の一つを耳下腺と名付けて耳の下にある。(お染カゼ或はハサミバコ又は阿多福カゼと謂ふて兩方の頬が脹れるカゼはこの腺の病氣である)それから顎下腺と稱して顎の下にも同じ様な腺がある、又舌下腺と謂ふ腺が舌の下にある。此の三つの腺が旺んに唾液を製造し各々導管を通じて口内に唾液の輸送をして居るのである。

先づ食物が吾人の口内に入ると直ぐに此等の腺から各導管によつて唾液を口中に注ぎ、食物と混合して之れを滑らかに容易く呑み込める様にして胃に送るのである、此の食物が胃に來れば胃袋の中にも種々な腺體があつて胃液を製造し同じくそれを導管

によつて胃の中に注ぎ食物を消化する。此消化を受けた食物は粥の様になつて腸に降れば腸からも腸液の出るのは勿論、遠く腸を離れた肝臓及び脾臓より導管を通じて消化液を輸送し來り食物に最後の消化を與へるのである。斯様にして食物が消化を受けてドロ／＼の液體となつたものは腸の絨毛と稱する丁度ビロウドの様に澤山に生えて居る毛の如きものより吸ひ取られ、それが血管中に入り全身に循環して吾人の生命を保つて居るのである。斯様に食物を消化する液を出す働きを消化液の外分泌と名付け是等の腺を消化腺と稱して居る。

この消化腺以外に尿を製造する腎臓がある、此の腎臓から製造された尿は輸尿管と謂ふ導管を通じて膀胱内に來りこの膀胱内に貯溜された尿は隨時尿道を通じて體外に排泄する様になつて居る。

又皮膚の中にも汗腺と謂ふ汗を出す腺があつて製造した汗は同じく導管によつて皮膚の外方に排泄する。斯様に分泌腺には夫れ／＼自分が製造した液體即ち分泌物を導

管によつて身體の表面又は體內に外分泌或は排泄する作用があるのである。

◎内 分 泌

然るに吾人及動物の身體中には導管のない分泌腺がある、假令ば喉頭の下の處に甲状腺と言ふ腺體がある、此の甲状腺は拇指位な小さな腺體であるが其上方にも副甲状腺と云つて豌豆粒位な小さな腺がある。又腎臓の上の方にも副腎と云つて丁度腎臓の帽子の様な形をした小さな腺體がある。それから胸骨の後にも胸腺と云ふ腺があり、又腦の中にも松果腺、腦下垂體と云ふ小さな腺體がある。以上の腺體には何れも導管がなく、孤立して居るから一見何の働きもない様に見えるが、この導管のない腺が何の爲めに身體の中の而かも重要な場所に陣取つて居るのであるが、又何如なる働きをなしつゝあるかと謂ふことが古來より大いに疑問とされて居たのである。

然るに是等の導管のない腺體は最近醫師の臨床に於ける實驗と動物試験の結果

とに依つて吾人生活體に非常に重大なる機能を司さざつて居ると云ふよりも、寧ろ神秘的不可思議な作用があると言ふ可きで之れ等導管なき腺體の存在によつて吾人の生命を保ち、發育を助け、新陳代謝を旺んにし、又智識、道義心等の重要な任務を支配して居ることが明瞭となつて來た。

是等神變不可思議なる作用の實驗的證明は人類及び動物の實驗的研究によつて最早や寸毫も動かすべき餘地のない學說となつたのである。その實驗證明は次章に述ぶることとし、そも是等の腺體が導管なくして如何にして身體中に、この不思議なる物質を分泌するか。この疑問は次に述ぶる理由に依りて解決することが出来る。

抑ら前述も如く是等の腺體には導管なく従つて自己腺體より製造されたる物質は導管なきが故に分泌する所の道はないのであるが、その代りに自己腺體中を通つて居る内方の血管内の血液に滲透作用（即ちニジミ出ル）に依つて注ぎ込むのである、それであるから、之れを内分泌と名づけ、この血管内に内分泌された物質（化學的物質）

をホルモンと云ふのである。此のホルモンが直接に血管内に入り血液と共に全身に循環しつゝ、身体内の各臓器を刺戟し覺醒して各々其任務を全ふせしめるのである。それ故に此の内分泌が減少して臓器を刺戟する事が少なくなれば、それだけ臓器の働作が緩慢となり、若しくは停止するに至るのである。而して此の臓器の働作が緩慢若しくは停止する事により老衰或は老死を招來するは當然であると謂わねばならぬ。

倍て之れによつて自己腺体内に製造したる化學的物質即ちホルモンを滲透作用によつて血液内に送り込む處の内分泌作用は了解し得らる可きも。腺体内にて製造さるゝホルモンとなる可き原質の何れより採るやと謂へば矢張血液中より吸収するのである。即ち腺體は血液中よりホルモン製造に必要な或る物質を吸収して自己腺体内に於て全く性質の異りたる、化學的物質に改造し、再び之れを血液中に逆輸送するものであるが、かく逆輸送する作用を内分泌と名づけるのである。この内分泌された液體には一種の化學的物質を含有して居る。此の物質をホルモンと稱する事は前述の通りである。

ホルモンとは希臘語であつて、その意味を譯すると日本語の覺醒素或は刺戟素と謂ふ事になる。

以下この内分泌腺の箇々に就いて少し述べて置きたいと思ふ。

一甲 甲状腺

一、甲状腺の二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

◎内 分泌 腺

◎内 分 泌 腺

一、甲状腺。二、副腎。三、胸腺。四、腦下垂體。五、松果腺

一、甲 状 腺

上述せる如く甲状腺は頸部に在つて、喉頭の下方向氣管の兩側に存在し、拇指位の小さな腺體で何の爲めに、かゝる重要な場所に在るかは、古來より疑問とされてあつた昔の醫者は此の甲状腺に比較的澤山な血管が通つて居る爲めに、恐らく此の甲状腺なるものは、腦充血を起すから之の危険を防ぐ爲めに調節をする安全弁であると考へて居つた。處が千八百五十四年瑞西の或る外科醫が人間の甲状腺腫と謂ふ甲状腺の腫れる病氣を治療する目的で全部甲状腺を剔り出して仕舞た、然るに手術後に至つて大變な病氣を越して來た、即ち皮膚は一般に腫れ上り音聲は嘎がれ。月日の經過するに従

ひて腫れは治したるも。皮膚がポロ／＼として生麵の如く、毛髮の性質は變じて赤くなつて脱け精神は痴呆と化して終つた。此の事實が醫學界の注意を惹き舉つて研究をするこゝとなつた。

人間が幼少の時に甲状腺を剔り去ると骨の發育成長を害し、丈けの底い所謂一寸法師が出來上る、そうして精神の働きが甚だ鈍くて薄馬鹿者となり生殖器の發育は止まり、且つ目はドンヨリとして、太陽を凝視しても眩しくない。支那の諺言に太陽を睨むものは英雄なりと謂ふ事か有るが斯の様な英雄は何んの役にも立たない。

そこで面白き事は、甲状腺の移植である。人及び動物の甲状腺を除去する時は、上に述べたる如く、種々の障害を起すものであるが。若し之れに他の同種族の動物の甲状腺の一片を他の場所、例へば腹筋内に移植するか或は之れを磨り潰して、注射する時は、忽ち健康を恢復して拔けたる毛は生え、皮膚の腫れは去り、白痴も知識を恢復し、又、骨の發育も恢復して一寸法師になることを免れる。

此れ等の事實に依つて見れば、甲状腺なる臓器は必ずしも、頸部に在つて種々なる神経と連接して、居ることが必要でなく、上記の如く腹筋内、又は股の皮下に在つても其機能に差し支へない事が判るのである、斯の如く自然が頸部に之れを置いたければ、他の場所に在つても其の機能には防げないから人工的に之れを除去して、他の部分に移植しても其働きに變りのないことは、前に述べた如くである。

併しこの化學的物質たるホルモンを、甲状腺から分析して、これが甲状腺のホルモンであること證明することは出来ない、黒いものであるか結晶形であるか、砂粒状であるか、原素であるか、化合物であるか、又は一種類であるか二種或は三種もあるかそれも全く不明である。

ホルモン利用に就て面白い實例があるから述べることにする。

或る少年が生れ付きに甲状腺の發育が悪しく、其爲めホルモンの減少症を招來し、

學校の成績がいつも劣等であつた、父母は大いに、それを心配し、彼方此方の神佛に祈願をこめ。無論醫者には常に診療を受ける事を忘らなかつたが、少しも効能がない。昔から馬鹿に附ける薬はないと謂ふが實際だと思つて居た、處が或る人から教へられて、此の少年に羊から採つた所の甲状腺を毎日服用させた、すると不思議にもメキ／＼腦力を増し、大變に學校の成績が良好になつた、然しこの甲状腺の服用を怠る時は再び舊の如く薄馬鹿になつて来る。そうなるに、今度は子供の方からあのお薬を頂戴と、薬の催促をする様になつたそうであるが學術の進歩は終に馬鹿に飲ませる薬が出来たのである。

二、副腎のモルホーン

副腎は左右各一個づゝ腎臓の上に帽子の様に被つて居る腺體であつて導管のない腺體即ち内分泌腺である、其機能は随分古くから判つて居つて今より六十七年前に英國

の醫師アジソン氏が始めて副腎の故障から来る銅皮病と謂ふ病氣を發見した、それは全身の皮膚も粘膜も青銅色になつて終には死んで仕舞ふ病氣で、死んだ人の死體を解剖して見て副腎に病變があることを確めた其後多くの學者が研究した結果矢張り副腎が結核に犯された結果此の病氣に罹ると云ふ事に説が一致した。で現今では此銅皮病をば發見者の名を冠して、アジソン氏病と謂つて居る。然らば試みに動物の兩側の副腎を取つて仕舞へば、アジソン氏病が起るのであらうとは何人も考ふべき事であるが多數の學者の動物試験の結果は、副腎を除去すると身體は迅速に衰弱して、呼吸は困難となり、血液の壓力降り心臓痙攣を來し、忽ち痙攣を起して數時間の内に死んで仕舞つてアジソン氏病を惹起して、皮膚が青銅色になる餘裕すらないのである。

上述せるが如く動物の兩側副腎を除去して、死亡する際に血液の壓力が、下降するが爲めに、心臓痙攣を起すのが死因であると云ふ事實から、諸學者は争つて副腎中のホルモンたる化學的物質を發見せんと研究をした結果、我日本人にして。米國に

在住せる工學博士高峰讓吉氏に依つて、副腎中の不思議なるホルモンの一種が發見されて。アドエナリンと名けられた。これが世界で内分泌腺のホルモンを化學的に純粹に製せられた始めであるが、種々なる内分泌腺の内副腎のホルモンの一種たるアドレナリン以外のホルモンは一つとして未だ發見されぬのである。

ホルモンが化學的に純粹に製造された場合には最早ホルモンと云はないで、他の名稱が附せられるのである。ホルモンは總ての内分泌腺の總稱であつて成分不明なもの、名稱であるから、現在副腎中のホルモンがアドレナリンと名付けられたる如く總ての内分泌腺のホルモンも化學的に純粹に發見せられて、何等かの名稱を付せられることも近き將來であらう。

而して、此のアドレナリンは牛の副腎から製造された白色の結晶物であつて、世界第一の高價藥である。最近に此のアドレナリンを動物の副腎から製造しないでも藥品の化合により、人工的に製造することを、獨逸のストルフ氏が發見した。して見ると

内分泌されたホルモンも、人工的に製造することの可能性を証明されたのであつて、近來に於ける非常なる進歩と謂はねばならぬ。

アドレナリンは動物の血管を縮少させて、心臓の力を強めること及び、切開手術の場合に痙攣薬に混じて、注射すると小血管を収縮せしめ、切開しても出血をしないから、外科の手術に盛に用ひられて居る。其他子宮出血、胃潰瘍、吐血、肺結核、咯血等に賞用されて居る。

それから茲に、最も注意すべきことは、副腎を除去すれば、動物は痙攣を起して、數時間で死ぬるのであるから、副腎を除去して直ぐに、副腎のホルモンたるアドレナリンを注射すると、生命を救ふことが出来るわけであるが、試験の結果は、實際に救ふことは不可能であつた。して見ると、副腎中にはアドレナリン以外に尙一種或は、二種か三種のホルモンがあると云ふことも判るのである。

三、胸腺

胸腺は其の名の如く胸骨の後の方に在つて三つ葉の様な形をして居る腺體であつて人類に於ては、十歳から十五歳位まで次第に大きく發育し、春期發動期に至れば發育が停止して、大きくならないばかりでなく、漸次に小さくなつて老年に達すると全く消えて、痕形もなくなつて仕舞のである。

上述せる如く、春期發動期まで、漸次に増大して、それよりは漸次に消滅して行くことから考へて見ると、全く身體の發育及智識並に精神の發育に關係のある、内分泌腺ではあるまいかと云ふことが想像される。

動物試験 (骨なし子と一寸法師)

幼動物の胸腺を全部切除れば、第一に動物の成長が著しく障害される、第二に骨

の發育が障害される、これは二疋の一腹仔の内、一疋はそのままにして置いて、一疋の方のもの、胸腺を切取つて、成長後の成績を比べて見ると、胸腺を取り去られた動物は骨なしで一寸法師となるが一方の手術しない動物は何等異状がないのである。殊に骨の石灰化と云つて、骨が堅く且つ緊まるることが不完全の爲めに、手足の様な細長い骨は、屈して仕舞ふ事が多い、又歯が抜け變らないので、乳歯のままで、残つて居る。又た胸腺を切取つた鶏の産んだ卵の殻は、非常に薄くて、軟かくブヨ／＼して居るからである。第三は胸腺を除去すると、神経系統に障害を來して運動が不活潑となり、小供が歩行する如く、フラ／＼した歩き方をなし、精神の發育も障害されて子供の様な、状態のままで終る。それから男性女性共に、生殖器の發育が止んで仕舞ふから、春期發動期の徴候を現はさない、斯様な状態を「胸腺剔出性の白痴」と名付けて居る。

丁度甲状腺を除去した動物と非常に能く似て居る。

四、腦下垂體

(大男と大女と一寸法師)

腦下垂體は大腦の底部にぶらさがつて居る豆粒大位の重量僅かに一分二三厘の内分泌腺で、身體殊に骨の發育上重大任務を有するホルモンを分泌して居る。此の腦下垂體の人間に於ける疾患を始めて發見したのは、佛蘭西のマリーと云ふ人で、今から約三十五年以前の事である。腦下垂體の病氣の爲めに肥大するとか、或は腫物等が出來た場合には、假令病的であるにもせよ下垂體の機能が、異常に旺んなくなつて、其内分泌を増加して、骨端は非常の發育を來たすのである、それ故に未だ骨の固まらない將に發育中の小兒時代に此の下垂體肥大症に罹かる時は、手或は足の骨等が、異常に發育する爲めに驚く可き丈の高い人間となり即ち、十歳乃至十二三歳位

で既に六尺も七尺もある様な、巨人が出来るにも係らず、生殖器即ち、男子の陰莖。睪丸、女子の卵巣、子宮等は却て萎んで仕舞つて至極小さうなる。それから手足の様な幹状骨でない、頭骨の如きは身體の割合に小さく、頗る釣合の悪い人間となるのである、著者の幼少の時見世物興業で、丁度今述べた様な者を見た事がある。それは年齢は忘れたが、多分十三四歳であつたと思ふ、全身の丈が七尺位で田舎の屋根の軒よりも高く、可成りな肉付きであるにも拘はらず、首より上は三四歳の小兒の大きさを常に鼻汁を垂らし精神状態は、痴呆で在つた。それから此病氣が稍々骨の固つた年頃に發生した場合には、手或は足の先の大きく、彭撻状となつて、頗る妙な形になる、之れを肢端肥大症（アクロメガリー）と稱して居る。

此の様に腦下垂體が肥大するとか、腫物の出来た場合に現今では、耳の前の處に穴を開けて、其處から器械を入れて、此の腫物を切り採つて、病氣を治療する事が出来る様になつて居る、けれども何分にも、腦髓の底に奥深く潜んで居る小さい、腺體であるから、手術の際に腦を傷けて、死亡する患者が多いので、外科醫も漸次死亡率を減する事に、苦心して昨今餘程巧妙の域に達して居る。而して此の肢端肥大症の患者が病中に履いて居つた所の靴や、手袋を病の平癒して手足が小さくなつて不要となつたものを標本に出して居る衛生博覽會が外國に在る。

以上述べたる事實は病的にもせよ、腦下垂體の營養が可良に過ぎた結果、其内分泌即ちホルモンも従つて多き爲めに（内分泌過多症）前述の現象を示したのである。

之れを反對に、腦下垂體の營養悪しく（即ち内分泌減少症）従令ば、腦水腫の如く、腦に水が溜まつて此の下垂體を壓迫して、營養を障害し、機能を鈍くする場合に内分泌も随つて、減少し、全身の新陳代謝も亦障碍されて來るから、脂肪過多となり、肥胖症と謂ふ病氣を惹起し全身はマル〜と肥り活動が甚だ鈍くなる、小兒時に此病氣に犯されるれば（前述せる甲状腺及胸腺を剔り出せし時の如く）全身の發育（殊に骨の發育は）全く停止して、小兒の時のまゝで、生殖器も同様に、發育を停止し、

春機發動期に至るも、春情發露の徴候を來さない、之れを以て見るも、甲状腺、胸腺、腦下垂體は全身の發身上至大の任務を司るホルモンを分泌すると云ふ事が判かるのである。

五、松果腺

松果腺に就ては、未だ確實に判明せられて居ないが、腦髓を解剖して見ると、大脳と小脳との間に小豆粒位な、小さな内分泌腺がある、之れを松果腺と名付けて、重量は僅かに五厘位しかない。

此の腺の機能は漸く此頃になつて、少し許り判つて來た。前述の如く松果腺は、腺の内部に在るので、生存せる動物の腦を傷けない様に、此の腺を切除する事は不可能である。若し此の腺を切り取る爲めに、腦に傷を付ける事があれば、動物は死んで仕舞ふので、動物試験で困難なわけであるが、種々研究の結果、松果腺は腦下垂體とは正

反對の作用をなす者であるらしいと云ふ事に諸説の一致を見た。即ち松果腺は生殖器の發育を抑制する作用の立場に在るのであるから、此の松果腺の退縮するに至つて、始めて普通の生殖器發育状態が開始されるのである。随つて松果腺の機能が病氣か何かの爲めに、早く内分泌機能を停止した場合には肉體的並に、精神的に早熟して、六七歳の小兒の髻を生じ生殖器が完全に發育して、陰毛を生じ、知識の如きは、大人も及ばぬ事が多く所謂神童となるのであるが、併し元來が腦の病氣の爲めであるから天折を免れない。

上述せる各種の内分泌物は、各其化學的成分を異にして居るから、從て其機能も異なつて居ることは謂ふ迄もない。

導管を有して外分泌をなしつゝ、内分泌をなす腺體

以上は内分泌専門の働きをなす腺體のみであるが、茲に排泄管(導管)を有して外分泌をなしつゝ、内分泌をも兼ね行ふ腺體がある、此腺體内を開いて顕微鏡で調べて見ると外分泌をなす細胞と、内分泌をなす細胞とは、その場所が異なつて居てそれと別々に一群團をなして居て外分泌液は導管によつて腺體外に分泌し、内分泌液は自己腺體内の血管中に滲透作用即ち内分泌液をニジミ出して血液と共に體内を循環して居るのである。後章述べる處の脾臓、睪丸、卵巢腺等は外分泌及び内分泌を併せ持つて居る腺體である、之れに屬するもので末だ他にも一二同様の作用ある腺があるが繁雜を避くる爲めに之れを略する事とする。

一、脾臓

脾臓は前述外分泌の章に述べたる如く、導管に依つて、脾液を腸に送り、食物の消化を管む傍ら、別にランゲンハン島と稱する細胞の一群團を備へて居て絶へずホルモンを内分泌して、重大の任務を盡して居る。今此の脾臓を動物體内より剔り去る時は、動物は外分泌に必ず重症の糖尿病を發して大食家となり、咽喉の渴を瀕りに訴へることになる。而かも瀕りに水を飲むに拘らず、身體は非常に瘦せ衰へ遂に斃れて仕舞ふのである。それは脾臓中のランゲンハン島の内分泌細胞が剔り去られた爲めであると云ふことが判つた。近時糖尿病治療の目的に脾臓エキスを製造し、且つ之が研究をなしてある者あるは蓋し脾臓のホルモンを利用して治療に應用するのに外ならない。

二、生殖腺

男性の生殖腺たる睪丸は、精虫を製造して女子の卵子と相結び、後継者となる子孫を造る爲に、細精管細胞（造精細胞）と言ふものがある以外に、間質細胞（或はレデーヒ氏細胞又は發情腺細胞若くは内分泌細胞）と言ふものがあつて、此の間質細胞から睪丸ホルモンを、血液中に内分泌して男性的勢力を發現せしめて居るのである。女性の生殖腺である卵巣は、男子の精虫と結合して、子孫を造る所の卵子を製造する濾胞（男子の細精管細胞に對するもの）と言ふものがある以外に、男子と同じく間質細胞があつて、此の間質細胞から卵巣ホルモンを血液中に分泌して、女性的光彩を發現せしめて居るのである。

これ等の男性及女性の間質細胞が、ホルモンを内分泌することを、學問上から證明した人はスタイナーハ氏である。詳細は之を後章に述べることにするが、間質細胞が

内分泌することを證明出来ない以前にも古来より多數の實驗によつて、生殖腺中には何物かの内分泌細胞があると言ふことは、立派に證明が出来て居たのである。

◎生殖腺の内分泌作用（ホルモン）分泌作用の實驗と第二次性徴との關係

人類及び動物は生れながらにして、生殖器の區別がある。男子は睪丸であり、女子は卵巣である。生殖腺の區別が兩性區別の決定を與ふる根本である。この生殖腺による男女兩性の區別が第一次性徴と言ふのである。

第二次性徴は生殖器以外の男女性の區別を指すものである。即ち男女は生殖器以外に身體的及び精神的に顯著なる相違が認められる、例へば動物では、毛や羽の色彩とか身體の大きさとか、角の有無とか、人間でも音聲とか鬚髯とか、骨盤とか、或は精神的

に男性意氣、堅忍不拔などの點に於て異なつて居る。之が第二次性徴の顯著なる區別である。此第二次性徴の區別は男女兩性とも、春期發動期に至つて、著しく明瞭になるのである。之れ即ち男子の睪丸及女子の卵巢が發達する時期に至ると内分泌作用が旺盛になつて、血液中にホルモンを分泌して、身體の諸機關を刺戟し、且つ覺醒するからであるが、其實験證明は次のやうである。

◎偉大なるホルモンの働き

人類に於て、幼年の時に兩側の睪丸を除去する時は、男性の特徴が現はれず、春期發動期に至つても、第二次性徴が現はれない、従つて喉頭は發育せず小供の如く小にして、高調なる音聲を發する。即ち聲變りがしない。鬚髯も生へず、勿論異性に對する性的感情、即ち性慾は消滅し、異性に對して不關性となるのである。其外觀も男性的特徴を欠き、腦力の發育悪しく、従つて智識、道義心に薄く、殊に男性の特徴で

ある精力と忍耐力を欠き、所謂堅忍不拔の氣象に乏しくなるものである。是等の事實は、朝鮮の宦官に於て見ることが出来る。朝鮮の宦官が後宮中に入して、妃嬪に接することを許されてあるのは、睪丸を除去して、男性的特徴を消滅さして中性となしてあるからである。

他の鳥獸類に於ても同様で、幼時に於て去勢する時は、角のある獸なれば其角の發育悪しく、鶏なれば鶏冠は頗る小さく蹴爪を生せず、雄鶏の特徴である晨聲を發せないのみならず、争鬪癖も又なく、交尾をも爲さないものである。斯くて新陳代謝衰退のため、脂肪肥滿を來たし、筋肉は甚しく弛緩し軟かくなるから食用に供するには極めて佳良である。食用を目的に去勢した雄鶏は脂肪肥滿の爲め肉の柔かくなつた時を利用して、家禽商は去勢後十數日の間に之を絞殺するのである。

◎男性に還元

斯くの如く第二次性徴を現はさないで、中性となつたものに、睪丸の一片を腹部の筋肉内或は、背部の皮下にでも植付けるか、又は睪丸を磨り潰して液体としたものを、皮下或は筋肉内に注射すると、遅れ馳せながら性の特徴が現はれて来て、鶏なれば鶏冠が立派に發育し、蹴爪も生へ晨聲を告げ交尾慾も發現して来て、男性に還元するのである。されば睪丸は必ず陰囊内になくとも差支はないのである。以上の事實によつて考へて見ると、睪丸は精虫を製造して、導管によつて精液を排泄するのみでなく、性別を司る内分泌細胞があつて、血液中にホルモンを内泌して居ると言ふことが判る。此内分泌する細胞は、即ち間質細胞であると言ふことを、スタイナーハ氏が證明したのである。(卵巢に就ての試験も同一理論であるから之を省略する) 内分泌腺の圖は後章に掲出する。

◎スタイナーハ氏の内分泌腺の證明

スタイナーハ氏は、睪丸或は卵巢中の内分泌腺は、何れの細胞であるかと言ふことを動物試験に依つて證明した、即ち動物の幼少の時に睪丸を除去し、其睪丸を腹部の皮下へ植へ込むで置くと、其動物が成長して發情期になると、男性的の發達は他の動物に較べて少しも異なつた所がなかつた。それで此の動物の腹部の皮下を開いて植へ込むだ睪丸を切り取つて、顯微鏡で調べて見た所が、睪丸中の精虫を製造する細胞である細精管細胞は、消滅して仕舞つて居るのに反し、間質細胞は少しも、消滅して居ないのみならず、反つて増殖して居り、細精管細胞の消滅した場所までも、發生して居たのである、斯様な試験を諸種の動物に實驗して見た結果によつて、此の間質細胞なるものが、性別即ち第二次性徴を發現させる内分泌細胞であると云ふことを確めたのである。

スタイナーハ氏は尙、更に進んで人類及動物の男女性の別れる所以は、全く睪丸と卵巢との内分泌物(ホルモン)の性質が異つて居ることに着目した。之れを動物に試

験して自由に男性動物を、女性に變化し、女性動物を自由に又男性動物に變化させることに成功したのである。これがスタイナー氏の性の任意的人工變化と云ふ偉大な論文で千九百十二年即ち、今より十年前に既に發表したのであつて、之れが若返り法の根本原理と云ふべきである。

◎男女兩性の人工的變化

ス氏は動物の牝、牡は其外觀が異なつて居ることを利用して左の試験を試みた。

(甲) 發情期前の若い牡モルモットの兩側の睪丸を抜き取つた(去勢すること)

(乙) 同様なる若い牝モルモットの兩側の卵巣を抜き取つた(去勢すること)

そこで(甲)の牡モルモットに(乙)の牝モルモットの卵巣を股の皮の下に植附けた、今度は(乙)の牝モルモットに(甲)の牡モルモットの睪丸を股の皮の下に植附けた斯様にして男と女との生殖腺を取り替へてそうして其經過を見て居ると此のモルモ

ットが成長して行くに従つて男が女となり女が男となつて仕舞つた、即ち其の外觀性情までが變つて仕舞つたのである、モルモットの牝、牡は、外觀が非常に異なつて居ることは他の小動物には見られぬ位である。最も著しい事は交尾せんとする状態が女であつたものが頻りに男であつたものを逐ひ廻して全く男の如き舉動をし男であつたものが其反對に女の姿勢をする様になつた即ち之れがス氏の「任意的男性の女性の變化及女性の男性的變化」と稱する有名なる論文である。これに依つて見ると男女の性別は睪丸と卵巣との中に分泌されて居る成分即ちホルモンが血液の中に混じて身體を循環する爲めであること及び睪丸は必ず陰囊になくとも差支なく卵巣も腹の中に奥深く潜んで有らなくとも身體の何處にあつても差支ないのみならず子宮とか喇叭管と云ふ様なものと連絡を取るの必要はないことがわかる、そして唯植附けた處に於て身體の營養を受けて生きて存在する事が必要條件である丁度接木をした様にそれがうまく生き附くことが肝要である。

男性が女性に變化した状態に就て少しく委はしく述べる、男性のモルモットに卵巢を植えたものが生長して春期發情期が來ても陰莖は少しも發育しないのみならず變化して陰核の如き外觀を呈し、攝護腺や精囊も少しも發達しないが、若し卵巢を植ゑ込むときに、子宮や喇叭管を一所に植ゑて置くと、子宮や喇叭管は牝の如く大きくなるのである。乳暈、乳頭は圖にある如く漸次發育して牝の如き形状となり其他體重、骨格、身長、胸圍、頭幅、頭長、等に至るまで一腹仔の牝に比べて著しく小さくなつて居ることは圖によつて明かである。

又牝の牝になつたものは(牝化せる動物)上に述べたる如き外觀上の變化のみならず精神的の變化をも來すものである。

◎精神的の變化(精神的第二性徴の變化)

牝に變化した動物は、云ふまでもなく男性の情慾がないから情慾の旺んな牝を近づ

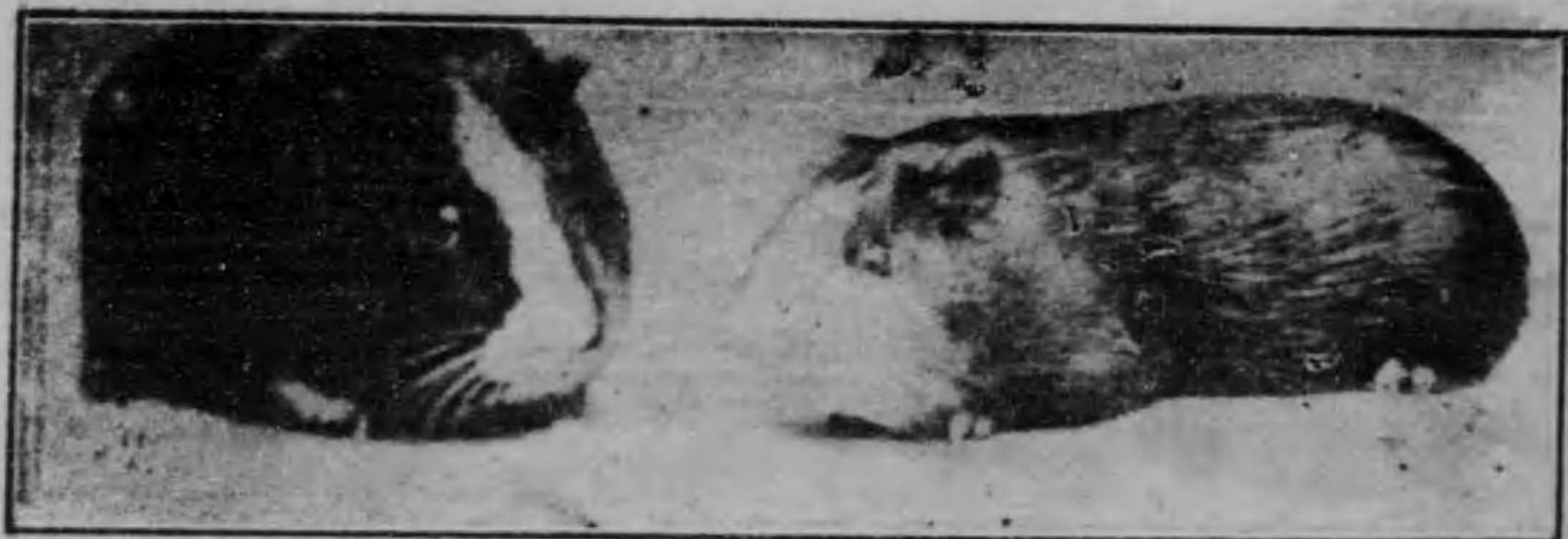
第三圖



本圖は一腹仔の兄弟にして、一疋は手術せず、一疋は手術によりて化せしもの

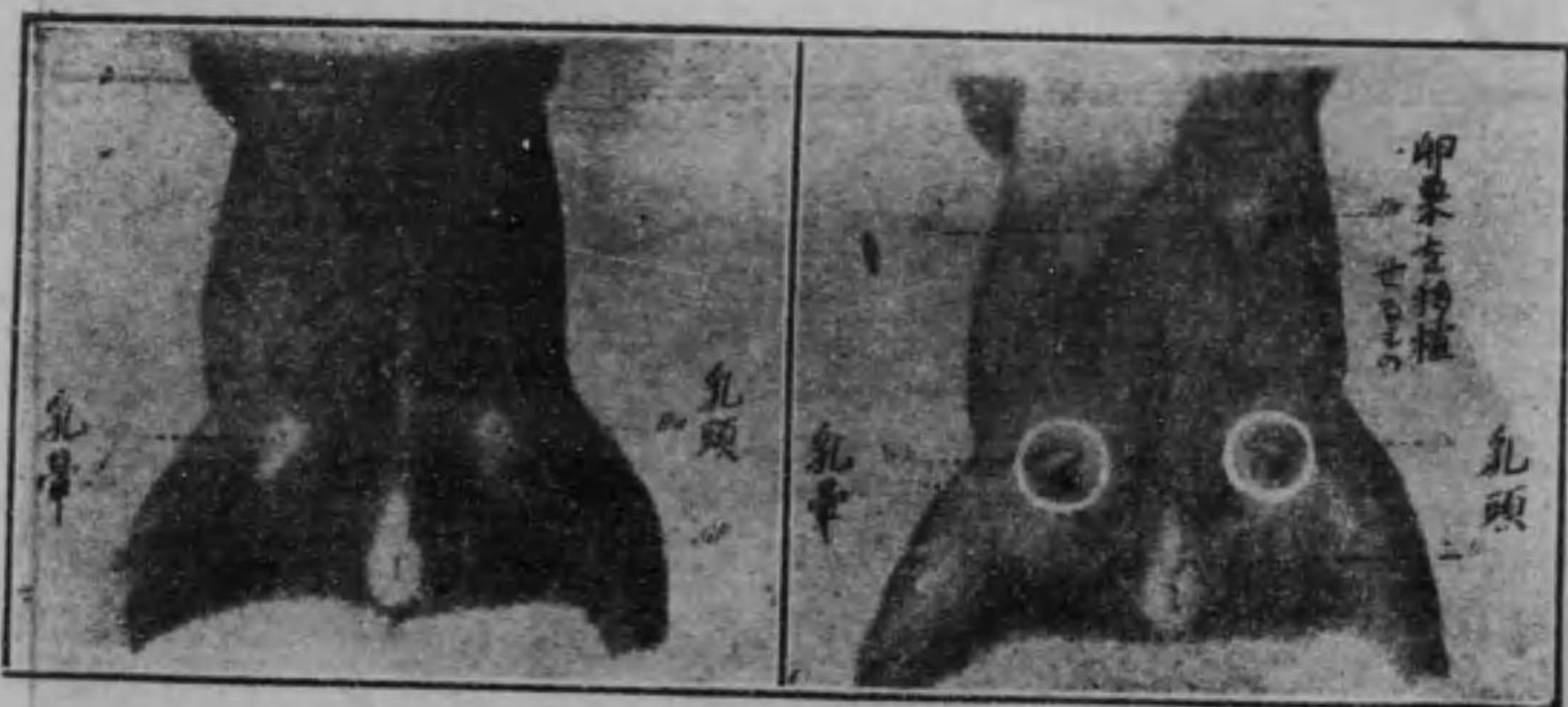
男鼠
女化せる鼠

第二圖



男モルモットの女モルモットに變化せしもの

一腹仔の比較動物男モルモット



男モルモットの女モルモットに變化せしものに乳量乳頭の形状

同上男モルモットの乳量及乳頭の形状

けても少しも情慾を起さないで全く女と化したのである。之れと反對に牡を近づけると此の牡に對して發情をした動作をするのである、この發情動作と云ふものは牡が近くに来るを提尾反射 Schwang reflex と云つて直に尾を平らに舉げて、自己の牝であることを判断させる爲めであつて、牝の陰部の臭によつて牡が、それを判断するのである。此の提尾反射は雌を雄と間違へられて争闘を仕掛けらるゝことを避ける爲めの豫防策であらう。

それから防衛反射 Abwehr reflex と云つて後肢を高く舉げて牡の飛び掛るのを防ぐ動作をする、之れは牝が情慾の起つて居ないから、如何程さわいでも無益なことでありと云ふ事を知らせる舉動である。

上述せる如く動物の實驗によりて牡を牝に變化させたものは、乳腺、乳頭が大きくなり其の反對に、骨格、頭周圍、胸圍、等は小さくなり、毛の生へる工合迄も牝の如くなつて仕舞う、且つ精神的の動作に到るまで全く女となり終へて仕舞ふのである。

スタイナーハ氏は斯の如く十數年間種々の方面に苦心して研究したのである。

四〇

◎生命と生殖腺

壽命に長短の異なる原因は不明であるが、生殖器と關係のある事は疑ひのないようである。それは生殖の目的たる後繼者を得た時が死期と言つて宜いからである。

伯林大學病理學教授ハンゼマン氏は、動物及び植物にありて生殖機能と壽命との間に一定の關係があるといふことを唱道した。彼の昆虫の中には生殖の事業を畢るや否や直ちに死亡するものが甚だ尠なくない。植物にも同様のものが多い。一年生の開花植物もこれに屬する。これ等の植物は花を開き實を結ぶによりて内分泌原質を消失するから死亡するのである。

蠶が繭を作つて蛹となる迄には、五週間かゝるが蛹が蛾となり、繭を喰ひ破つて出て來てからは直ちに交尾し、産卵して二三日で死んで仕舞ふ。その間食物は絶対に

取らない、夫れ故に羽根も不完全で空中を飛ぶことは出来ない、食物を取る仕掛けは丸で出來て居らぬ。蠶では成熟期（春氣發動期後）が成長期より、遙かに短かい。同じ蝶々の類でも一定の樹木を選んで之に産卵せねばならぬと云ふ者になると適當の樹を撰んで産卵すべく飛行の具も消化の器も備へて居り、随分長生するものがある、若し長生しなかつたならば、生殖の目的を果して後繼者を得ることが能きぬからである。蜉蝣は發情期までには數年を要するが、成熟すると其の日の中に交尾し、雄は其場で死し、雌は水邊に行きて産卵し終ると、直ちに死去する、故に朝に生れて夕に死するのではなく、五年前から生きて居て朝に成熟して夕に死するのである。蜜蜂の雄は交尾を終れば直ちに死ぬるが雌は數年生存する、それは雌に於ては男性の精液を體內に貯藏し、巢に戻つてから數年間産卵するからである、何れも生殖の目的を果した者は速かに死亡し、否らざる者は長生するのである。

婦人の生殖機能は十五六歳に始まり四十五六歳で終るから天壽は五十歳以下である

べきに六七十年に達する者のあるは如何にと云ふに、人間の子女は蛙や魚の子の様に産み放しにして置ては育たぬからである。

植物に於ても生殖を終ると枯死するものが少くない。竹は約六十年に達すると、花が咲き實を結び、而して其の歳に枯れる。龍舌草は母國メキシコでは十五乃至二十年目に花がさき、其の年に枯れる。然るに之を歐洲に移植すると其土地と氣候の關係により百年目に花が咲き、其歳に枯れる、百年植物の別名がある。印度産のタリポット椰子も歐洲に移植すると五十年から百年の間に一度實を結び其年に枯れる。斯くの如く生殖の目的を果たすと、直ぐ死する植物が少くない。尤も或る種の植物は毎年結實するに拘らず、容易に枯れぬものがあるが、恐らく人間や他の動物の爲めに、其の實を喰はれる杯の爲めに後継者を得る事の困難であるからであらう。

唯た一つの草花に就いて見ても之れが花を開き實を結んでさうして枯れて行く有様を見ると如何にも生殖の働きの主であつて、一個體の生存は、或意味に於て此の生殖の働きの従事して居ると云ふ考へを起し得るのである。

本來生命の大なる使命は二つある。其の一は自己生存である。他の一は種屬保存である。換言すれば——飢餓と戀愛——とに外ならぬのである。而かも其の中何れか重きをなすかと云ふと、或意味に於ては種屬保存の方が自己の生存よりも重きを成すものであるまいか。念ふに親は死し、子は死し、孫は死するも、尙ほ生物が萬年に亘りて其生存を確實にすることが出来るのは、即ち種屬保存の作用が自己の生存を犠牲に供して迄も能く行はれて居るからである。

斯様に生物の中心は生殖器であつて、其の性慾の旺んな間は是れに従屬する身體も健全であつて頻りに子孫の繁榮を要求して居る如く思はれる。併し從來は何人も身體の働きの即ち體細胞の働きの衰弱するから生殖器の働きの衰弱するものであると考へて居たのであつた。然るに、スタイナー氏は生物の老衰するのは生殖器が衰弱して鈍つて來るから身體が衰弱するのであるから、生殖腺を強壯にして内分泌物の製造を旺

盛にすれば身體の細胞も自ら旺んになつて若返るものであると云ふ事に着目したのである。

四四

◎老衰の最大原因は生殖腺の衰弱

生活體の大體機能の上から考へて、何れが重きをなすかを考へると、寧ろ生殖腺の衰弱が主となつて漸次身體凡ての機能が衰へて來ると考へるに至當とする、而して先づ第一に、さう云ふ點に着目したのが佛蘭西の生理學の泰斗であつたブロン、セカール氏である、氏は自分の學說の立場から、生殖腺内分泌の働きの重要なことを確めて、生殖腺の機能衰退が、身體の一般の老衰を惹起す原因であるから、生殖腺の機能を補充することによつて身體の細胞を若返へらす事が能きるであらうと云ふことの實驗を自分の體に於いて試み、其の成績を、一八八九年六月一日に巴里の生物學會に於て報告したのである。其の當時ブロン、セカール氏は七十二歳の老翁であつたが

其の報告に依ると自分は若い時から身心共に強壯であつたが、近年になつて心身が疲れたり、記憶が衰へるとか、聴力、視力が鈍るとか、消化障礙の起るとか、凡て甚しく老衰の症狀を覺へた。そこで自分は、是れ全く翠丸の内分泌が衰へた結果であらうと考へた、若しさうであるならば、翠丸の或る大切なる成分即ちホルモンを外から注入することによつて、一旦老衰した身體を若返へらす事が出来るだらうと思つて、犬の翠丸から、エキスを造り、自ら自分の身體に注射して効力の如何を試みた。處が氣分は爽快となり、肉體も健康を恢復し頗る若返つた状態となつた、之れが爲めに喜び勇んで其詳細を學界に報告をした、爲めに其の當時非常に刀圭界の評判となり癌腫、結核等の如き慢性病に迄翠丸或は卵巢エキスを應用する盛況を呈した、然るに其の後此の成効はエキスが効くのではなく一つの暗示の爲めに効能が有るのだと云ふ説が獨逸の或る一派の學者によつて唱へられた、然し此の反對者の多くはブロンセカール氏の如く新鮮なる翠丸の組織全部を磨り潰して食鹽水で稀めた液を注射す

四五

る方法を用ひないで他の方法によつて造られた睾丸製剤を用ひた、其理由は睾丸液を其まゝ用ゆる時は、注射に際して非常なる疼痛を供ひ又は發熱痙攣等の副作用を來たす事あるを以つて此れ等の副作用を豫防する爲めと且つ腐敗を防ぐ爲めに睾丸の組織を食鹽水或はアルコール、エーテル等に浸出し或は藥品を以つて溶解し之れを睾丸エキスト同様なる効力あるものと信じて使用せしものであつた。彼のスベルミンの如きはそれでは等加工せられたる製剤は睾丸中に含まれ有る。物質の溶解性のもゝみを溶かしたるに止まりて睾丸内に在るホルモンが該製剤中に溶解せられて存在し居るや否やは頗る疑はしい問題で其の實睾丸エキスの有効なる成分即ちホルモンは、前述の藥品に溶けない渣の内に蛋白質と化合して存在して居るで有らうと云ふ見解を持つて居る學者が多いのに拘らず是等の製剤には其の肝要なる蛋白質を故らに除去してあるから、何等の効能もないのである、内分泌學者として世界第一の碩學ビードル Bidell 氏等の實驗報告によれば睾丸製剤たるスベルミンは神経系統にも新陳代謝作用

にも何等の効果を認めず即ち無効にして無害なりと、之れに反し新鮮なる睾丸エキスは新陳代謝機能を昂進し、去勢後に來る諸種の障害を制止し且つ又去勢鶏 (Kabanu) に就いて研究するに鶏冠、蹴爪等の發育は大となり其他凡てに於いて男性的に還元し消失せし争闘癖等を現出せりと又去勢せざる若き雄鶏に睾丸液を注射すれば普通の雄鶏よりは、より以上の雄性を發揮し鶏冠、蹴爪の發育大となれるを實驗せり。又ロートブレゲル Toth Pregel 氏は筋肉力量に影響し其五割を増すものあるを證明せり。然るに今更らしくは是れ等製剤に就いて故らに其効果を誇張する學者(?) が我が日本にも一二人出來た様であるが如何にも幼稚なものである。ブロンセカール氏の説は主として是れ等製剤を使用したる醫師の報告によつて其聲價を失つたけれども、枯れた草も春になつて新しき芽が出ると同じく、スタイナーハ氏の新しき研究によりて再び、より以上嶄新なる若返り法が發見されたのである。

◎若返り法には三種あり

近頃スタイナツハ氏若返り法が世界に發表されて以來、若返りの賣藥、若返り電氣若返り美顏術等種々なるものにて若返りと云ふ文字を附けて、ひたすら世間の人氣を集めることを企だてる様になつたが、科學上から翠丸のホルモンにより若返る法は三種より外にないのである。即ち第一は生殖腺エキス（男子に翠丸エキス。女子に卵巢エキス）の注射。第二は生殖腺（男子の翠丸、女子の卵巢）の移植。第三はスタイナツハ氏若返り手術の三種である、それで第一の注射若返り法と第二の移植若返り法とは何等の人氣もなく、また攻撃も批評もないが、第三の手術による若返り法は世間から種々と攻撃があつたが、是れは些細の動機から間違つて攻撃した事が、所謂、一犬虚に吠へて萬犬實を傳ふると云ふ諺の如く、野次馬的に攻撃批評したものであつて何等の謂れのない事であることは卷末にある余が九月廿八日より十月中旬に亘つて

諸新聞雑誌に氣の毒ながら一大鐵槌を加へて記載せる通りであつて、何等研究も學術上の素養のない野次馬連の批評であるから、余が數回の談話によりて全く鳴りを沈めることであらう。歐米人も是れに對して批評のあることは恰も飛行機の出來た時に、飛行機なるものが理論としては然るべきも實際的實用には不可能だと種々批評されたのと同であるが、歐米人の批評は立派に學說の上から科學的に一々實驗を積んでの批評であるから、假令その議論が反對であつても奥深い感じがする、日本人の批評の如く野次馬ではないのである、歐米人の批評に對しては卷末に掲載することとする。三種の若返り法の内余が日常實行して居るものは、第一の生殖腺（男子に翠丸エキス、女子に卵巢エキス）の注射と、第三のスタイナツハ氏若返り手術であるが何れが優れるやと云ふの議論は其の年齢により其の病氣の性質によりて一様ではないが、要之、ビールと日本酒が何れが優れるやと云ふ議論と同じ事であつて、第一のものは弱く、第三のものは頗る強いのと同じであるから、ビールも澤山の分量を飲むと酔ふ

ことは日本酒と同じ事であらねばならぬ。それであるから手術をすることを欲せない人は毎日來て注射をすべきである、十五回乃至廿回の注射が必要であるが、スタイナツハ手術は一回のみで、手術後五六日間繃帯を交換に來るのみでよろしいのである、勿論手術は全く無痛で、絶対に危険はなく、且つ何等の犠牲もないのであつて、余が手術せる患者の内には手術後に至り、非常に生殖器勢力が昂まつた爲めに非常に迷惑だから元の通りにして呉れど云つた頗る不思議な人があつた、それで余は切斷せる輸精管を元の通りに過ぎ合せてやつたが已に恢復した勢力は全く元の如くにならなかつたから丁度いゝ加減になるであらう。

生殖腺エキスの注射は主として青年の神経衰弱患者や生殖器機能障害に施すべきであつて、スタイナツハ氏手術は四拾歳以上の人に施すべきであると結論すれば先づ差支はあるまい。併し青年者でも澤山スタイナツハ氏手術を行つた人があるが何等差支へはないのである。

▲スタイナツハ氏の

若返り法

ス氏は十年の星霜多數の論文を發表して居るから世界の學者はス氏の論文を基礎として種々研究したのであつた。私共も睪丸及卵巢エキスの注射及移植法に就ては研究と實行とを怠らなかつた一人である、然るにス氏は是等の殆んど完全に近き若返り法を彩色して吾人の考への及ばざる方法を以てする若返り法を考案したのである、此の破天荒とも云ふべき若返り法の手術は最も簡單で何等の危険も伴はない方法であるが其理論は解剖學上の智識を要するものであるから今簡單に述べる必要がある。抑も陰囊の中にある睪丸の内面を開いて見ると小さな管が幾千本となく蜘蛛の巢の如く

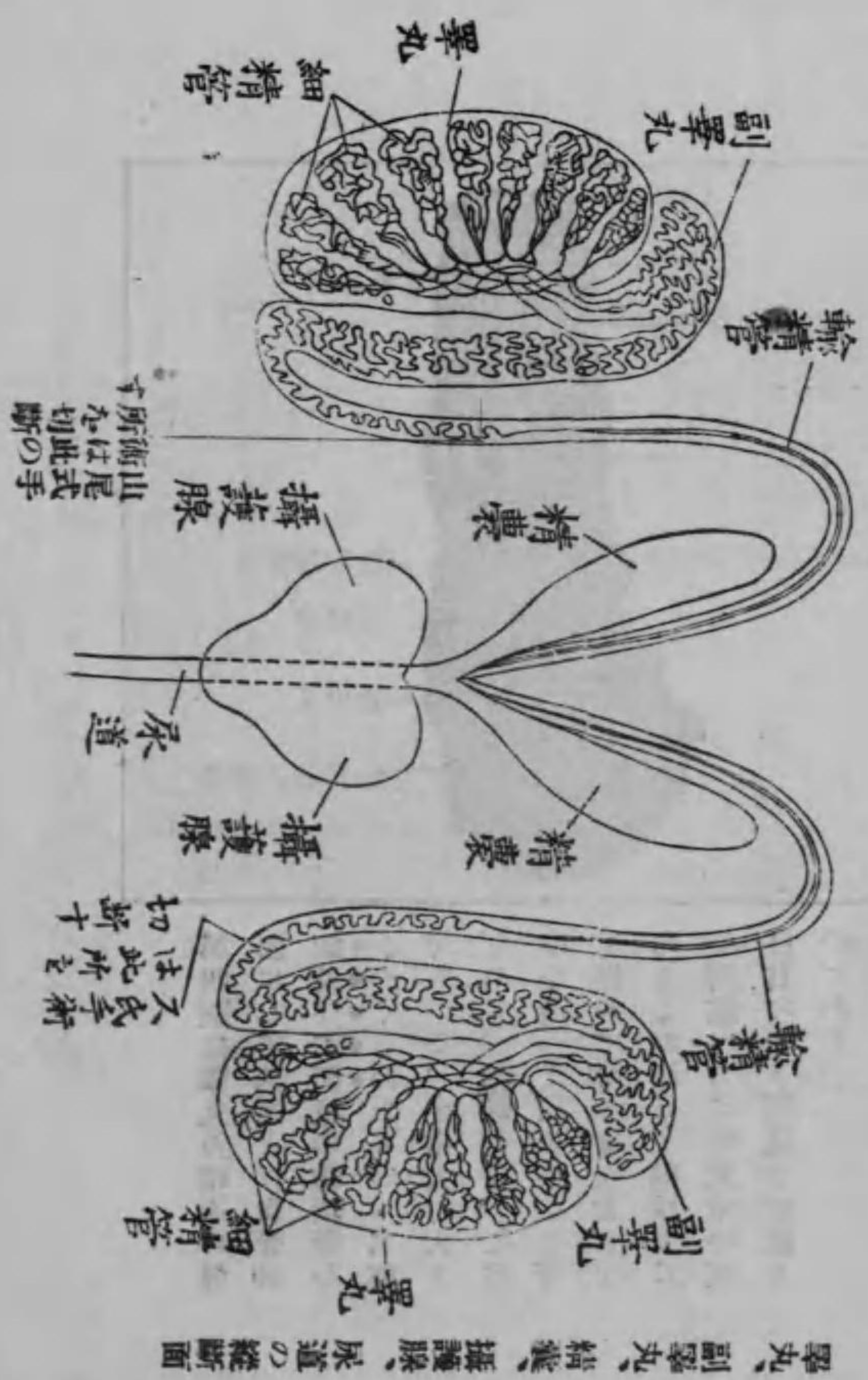
又恰も糸を丸めて球となしたる如く入り亂れて居る此小さな管を細精管(第五圖参照)と名すけてゐるが此の細精管の幾千本が上方にゆきて集つて一本の管となつてゐて細精管から製造された精虫を輸送するのである此の意味から輸精管と名づけて居る而して此の翠丸中の細精管と細精管との中間に間質細胞が存在して居る(第六圖参照)此の幾千本の細精管が集まつた輸精管なるもの、大きさは圖に示せるが如く僅に燈心大の小さな管であるがス氏は此の小さな輸精管を切斷することによりて若返り法に成功したのである、(第四圖参照)それは輸精管を切ると其の支配を受けて居る澤山の枝の細精管は精虫の輸送が絶たれるので製造機能を失ひ自然に萎縮するのであるが、萎縮した所には當然空虚な場所が出来るのであるが此の空所を何物か、充たさねばならぬ、此の空所を充すものは即ち本問題の間質細胞である。

第六圖は三つの細精管を横に切つたものを顕微鏡で見たものであつて細精管の管壁の細精管細胞から精虫を製造して上方の輸精管に精液を送る實況である(イ)参照)



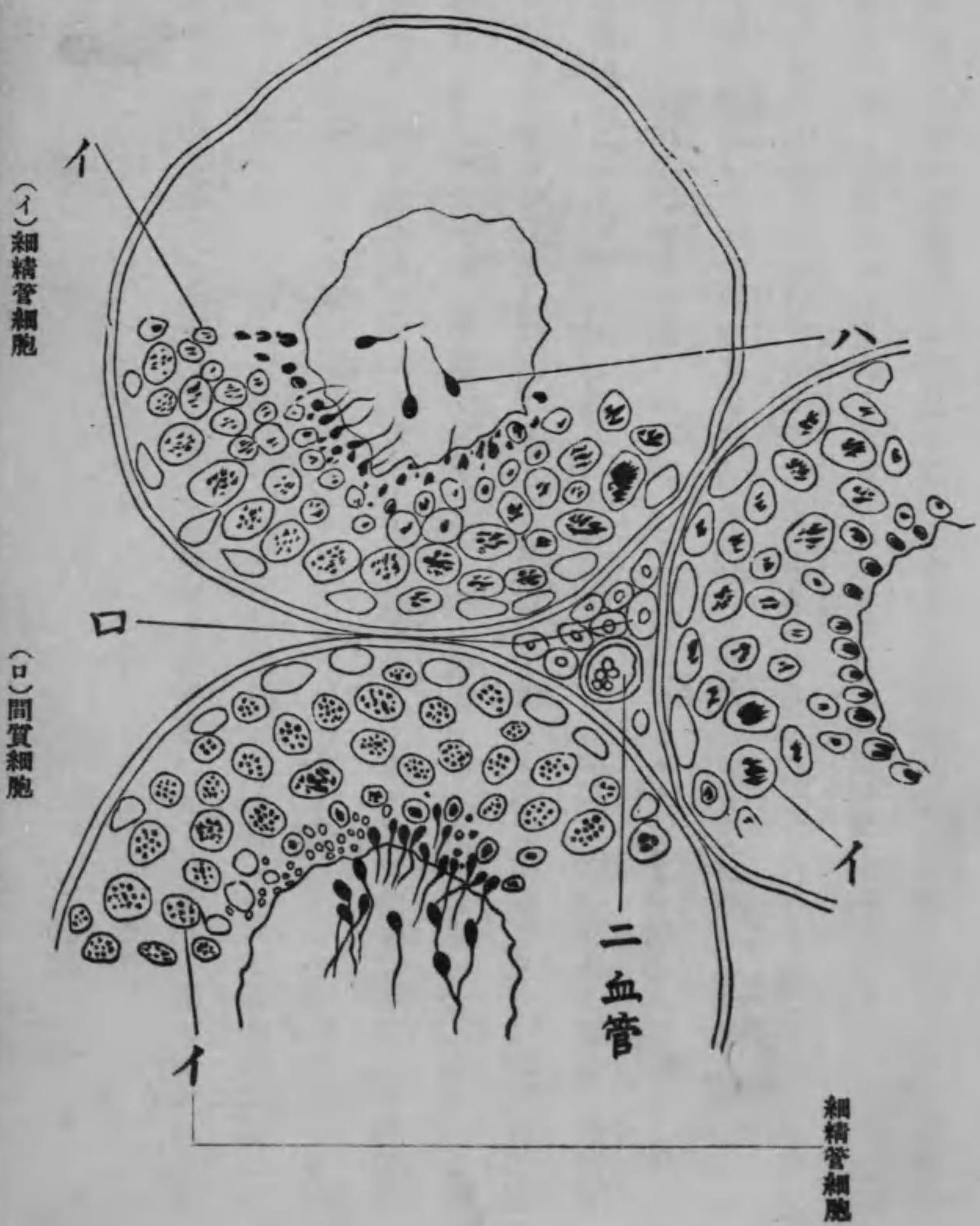
第四圖は翠丸及精系の外面にして精系とは血管神經及び本問題の輸精管をひつくるめたもの、名稱であつて、小指大の大きさである、輸精管は、この中を通つて居る小さな管で僅かに燈心位な大きさであるこの精系と輸精管とを間違へると順天堂の坂口君の如き間違ひが起るのである。

第五圖



睪丸、副睪丸、精囊、攝護腺、尿道の縦断面

第六圖 睪丸の一小部分の断横をてし鏡微てに見てたもるの



(イ) 細精管細胞

(ロ) 間質細胞



二五

此れは三本丈の細精管を現はしたものであるが實際は斯様に細き管が睪丸の中を蜘蛛の巣の如く澤山に入り亂れて居るのである。この細精管と細精管との間に間質細胞(ロ)があるが是れは細精管細胞の如く澤山集つて管となつて居るものでなく、全く一個一個に獨立した別の細胞であつて、細胞から製造したものを外方に分泌する管はなから、細胞と細胞との間にある(ニ)なる血管内にホルモンを分泌するのである。

尙重ねて言へば間質細胞は無数の細精管細胞の間に一小局部に存在して全く輸精管の支配を受けない獨立した細胞であつて内分泌を司るものである。之れが細精管の萎縮滅亡した場所に増殖して空所を充滿するが、澤山に殖へた新たな細胞からは若返り現象の源泉たるホルモンを注入するから全身に此ホルモンが廻つて方々の器管を刺戟して所謂若返り現象が現はれることは前章に述べたる睪丸のホルモンの働きと同である。斯くの如くにして此片側の輸精管を切斷したる結果は間質細胞が繁殖し盛んにホルモンを血液中に分泌すると此の血液は身體全身に環つて全身の精力を昂め又其

血液が一方の手術しない方の睪丸に循つて刺戟するから此方の間質細胞は勿論、細精管細胞も共に發達して精虫の製造能力即ち生殖力を昂め又性慾を旺盛ならしめるのである。而して此の輸精管の切斷手術は壯年時に於ては片側のみでないで生殖作用を絶滅するから行はないが老人になつて最早子孫を造るの必要のない時期になれば兩側を結紮すれば片側以上に精力増進の効力あるは當然のことである、茲に特に注意を要するのは精液の大部分は精囊攝護腺より分泌する液であつて(第二圖參照)睪丸より送らるゝものは精虫と少許の輸精液丈であるが故に兩側の輸精管切斷手術後と雖も精液の射出には何等差支ないのである。右の様な譯なれば壯年に片側を結紮し老衰して後更に他方を結紮するも宜いのである。世間には動もすれば此のス氏若返り法即ち輸精管結紮手術を目して危険であるとか甚だしきは本手術の結果陰萎を來たし若しくは生殖不能に陥るかの様に論議するものがあるが是れは全く解剖的智識の缺除せるか然らざれば至々事實即ち其發足點を誤れるものである。斯の様な誤解の起る第一の理

由はス氏若返り手術は輸精管の結紮を必ず兩側に對して施すものなりと見做すが爲めで壯年時代には片側のみに施す手術なれば性慾のみならず却て生殖力をも増進するものなる事を知らざるが爲めである。誤解の第二は素人にもわかる様な事を而も生殖器専門の大家先生が、輸精管の結紮と精系の結紮とを取り違へて堂々議論して居る人もある。(卷末參照)

◎山尾式若返り手術式(一名無刀手術)

スタイナーツハ氏曰く輸精管結紮の手術は、比較的壯年者にありては睪丸の副睪丸に移行する部分に於て施行するを可とし、老人には副睪丸の輸精管に移行する部分に於て施行するを可とす、上方鼠蹊部に於て施行するときは血管を損傷するの危険がある。と云つて居るが、ス氏の手術式は何れも陰囊を開き睪丸副睪丸を引き出して手術するのであるから、多くの患者は陰囊を開いて睪丸を引出すことを厭ふことゝ、局部麻酔

は勿論のこと半身麻酔ですらも精系の牽き切らるゝ様な牽引様疼痛は患者の堪へ難しとする所で、上方の鼠蹊部（俗によこねの出る所）は何故に危険なるかは次の如くである。

それは精系は多くの蔓の如き静脈及び動脈と神経と、本問題の輸精管が一纏めになつて強靱な鞘に包まれて居て、翠丸に連なつて居るのである。然るに此の強靱な鞘を開かんとして網の如き蔓状静脈を傷け又、蔓状静脈に包まれて居る輸精管を引き離さんとして血管を引き切り又は之れに傷つけて出血することがあつた、此の静脈の出血は、止血の困難なる爲めに危険を招いたのである、然るに余の手術は此の鼠蹊部に於て、何等の危険なく何等の苦痛なく數分間にして笑聲談話裡に手術を了し、直ちに歸宅して普通の事務を採ることが出来るのは全く刀刃を用ひずして余が考案せる器械によりて手術するのであつて即ち無刀手術式であるからである。而して全治までの日数は催かに五日乃至七日間である。

此の手術式の大要を述べば局部麻酔の下に鼠蹊部に於て皮膚及び皮下組織を切開して精系の露はるゝや山尾式鈍鉤によりて之れを掬ひ出し、指頭の感覺によつて輸精管の位置を觸知し、此の輸精管のみを器械にて引き出して切斷するのであつて絶対に危険のない手術である。

◎若返り法の動物實驗

ス氏は幾代も大黒鼠を使つて、その有様を調べて動物の心身の状態に就いて充分判断の出来るようにした殊に生慾の點については最も注意して觀察した、實驗を爲すべき試験動物として大黒鼠を選んだのは、いろ／＼の理由がある。即ち大黒鼠は其の壽命が極めて短く、平均生後二十七ヶ月乃至三十ヶ月で天壽を終はるもので、三十ヶ月を超ゆる事は極めて稀であり、従つて生後十八ヶ月乃至二十三ヶ月を終れば、早く既に立派な老衰の現象を示すものである、従つて老衰せるものを若返らせ其の壽命を延ばし得るや否やを試験すべき動物としては、短時日の間に多數の實驗を爲し得る點に於て頗る適當して居る、加之、大黒鼠に於ては老衰の起れるや否や、或は一旦老衰せるものが再び若返りしや否やを判断するに極めて適當なる標準があるからである。大黒鼠のみならず其他の種々な鼠やモルモットも使つて試験したのである。

大黒鼠に於ける老衰の現象としては、先づ第一に毛が脱落する。それは最も早く且屢々陰囊に於て起る。次いで背中・大腿・頸部・腹側等に及ぶものである。而して續いて全身に於て毛が著るしく薄くなる。又た皮下の脂肪が少くなつて著るしく羸瘦する。それに伴つて之れまで維持し來れる體重が急速に減る。斯かる動物は又極めて固有な姿勢を示し、頭を下げ背中を丸く墊かめる、同時に眼球は濁つて、ごんよりして來る、齒が著るしく延びて齒齦から露き出る、斯かる動物を殺して内臓を檢查すると、内部の生殖器即ち睪丸卵巢及びそれに附屬する種々なる臓器が著るしく小さくなる、此の事は肉眼的にも亦檢微鏡的にも立派に認める事が出来る。筋肉及び腹部の臓器の肉の色が白色を帯びて悪くなり光澤がなく乾いて居て一見若き動物のそれと區別する事が出来る。

斯かる身體上の變化と伴つて、其の機能の變化が著るしく現はれて來る。若き牡は其の運動輕快で外界の凡てに對して極めて好奇心強く、籠又は凡ての物に攀ぢ登り、

絶えず動き走り廻る。又二匹の若き牡を一緒に置くに勇敢に闘ふ。就中最も顯著なる點は性慾の旺盛なる事で、一匹の若き牡の中に若き牝を入れると、彼は直ちに牝を逐ひ廻し直ちに交尾する。其の間に彼は屢々おめかし(毛を舐めて綺麗にする)をする。之に反して老年の牡は運動極めて不活潑で、外界に對して頗る無頓着であり、争闘する勇氣も無く、他の若き牡を見ると直ちに巢の中に引き籠る。若き牝を見てもそれに對して頗る無頓着で、殆ど目を閉ちて毫も之れを追跡せんとする形跡なく、即ち全く性慾の減弱を證明する。彼は又食欲少く、日に日に瘦せ衰へ、呼吸も弱く若きもの、脈數が多きに反して老ひたるもの、心臓の打つ數は頗る僅かである。又牝を見るも少しもおめかしをする氣分がない。又眼や姿勢の變る事は前に述べた通りである。

— スタインナツハ氏は是等の標準に基いて、老衰せる牡に輸精管の結紮を試み、果して老衰を一掃して之れを若返らす事が出来るや否やを實驗的に解決しようとしたのである。氏は幾代も大黒鼠を使用して仔細に其の有様を觀察し、動物の心身の状態に

ついては緻密に之を判断する事が出来るやうにした。殊に性慾の點については、最も注意して之れを觀察し、之れによつて老衰せるや將た老衰より若返り得たるやを判断すべき好個の手懸りを得る事に努力した。其の爲めには、常に性慾旺盛なる若き牝を用意して置いて之れと検査しようとする牡とを一緒にして、如何なる動作を爲すかを注意して觀察した。

鼠に於ける輸精管の結紮手術は極めて容易く出来る手術である。手術の仕方並にそれに關する注意等は此處には省略する事にする。今斯かる方法によつて、スタインナツハ氏が多數の實驗を報告して居る中から次の一例を模範的のものとして引用する。

(實驗例)

同一の腹より出でたる三匹の牡、年齢二十七ヶ月。此の三匹の兄弟は、一千九百十三年の九月より十月に及び、六回若き交尾慾強き牝に接觸せしめたる結果、全く無

勢力なる事を見た。一千九百十年の一月より二月に亘つて、同様の試験を繰返して同様の結果を得た。即ち五六ヶ月以來全く性慾が消失した事を確めた。三四共に頸部及び背部に於て毛が脱け、毫もおめかしをやらぬ。運動は不活潑であり、營養も不良で、凡て著しき老衰の現象を呈した。

そこで三匹の中一匹を取つて比較の爲に撲殺し、解剖して生殖腺及び其の他の臓器筋肉等に於て、肉眼的及び検微鏡的に明かに老衰の現象を確めたる後本試験に取り懸つた。即ち残つた二匹の中の一匹を手術した。此の動物を假りに甲とする。残りの一匹の動物(之れを乙とする)は手術することなく其まゝにして置いた。

甲の手術は一千九百十四年の三月二日に爲された。四月の一日には、乙の手術しない方の動物は著るしく老衰の現象を表はし、性慾は全く無くなり、運動は極めて不活潑となり、絶えず睡眠して食物を攝らず、著るしく羸瘦し、四月の八日には衰弱甚だしく遂に死亡した。解剖の結果別に之れを認むべき病原なく、全く老衰の爲めに生命を終つたものと観察せられた。

之れに反して甲に在りては、手術後十日の後即ち三月の十二日には傷全く癒え

試みに若き牝の傍に近付けたるに熱心に之れを逐ひ廻はし、其の後を嗅ぐ事を見た。然しながらまだ交尾するに至らず、三月の廿日には若き牝と一緒に置きたるに甚だしく昂奮し、屢々旺盛なる交尾を爲した。且つ交尾後も尙ほ陰莖の勃起せるを認めた。三月二十三日性慾の發作は非常に過度にして、交尾慾あると否とを問はず、牝さへ見れば凡てに飛び掛り、交尾慾あるものに對しては十五分間に十九回の交尾を爲した。三月の三十日には陰囊其の他毛髮の脱落せる部分に美しき新たな毛髮を再生した。四月の九日には筋肉恢復し、他の若き強き牡と盛んに争闘した。性慾は依然旺盛であつた。四月の十日に(即ち手術後五週間)甲動物を撲殺して、内臓を剖見し、且つ其の検微鏡的標本を作つて仔細に之れを観察したるに、睪丸を初め其他の内部生殖腺は肉眼的及び検微鏡的に十分に恢復し、嚮きに試験に入る前に比較の

爲撲殺した動物から作りたる標本に較ぶれば、非常なる相違を示した。是れに由つて之れを観れば、同じ腹から出た兄弟の鼠にして而して手術を施せるものと施さざるものとに於て、一方が一旦老衰せる状態より再び若返りしに反して他のものは依然老衰を續けて死亡したのであつて、此の簡單なる手術が如何に若返り法として有効であるかを語るものである。

若返つた鼠は食欲も旺盛となり、體重も増加し、筋力も再び強くなり、脂肪も殖え、毛髪も再び美しく生え揃ひ、眼球の濁溜も消失し、悪しき姿勢も再び正當の姿勢に戻り、就中既に述べたる如く精神上の作用迄も頗る活潑となり、殊に性欲が著るしく昂進する。而して内部生殖腺が一旦萎縮せる状態より再び恢復する。而して肉眼的にも亦檢微鏡的にも若いものに見られるやうな性状に戻る。(左圖參照)

(實驗例)

二十六ヶ月の老ひたる牝。此の牝は數ヶ月來既に全く交尾慾を失ひ、従つて若き

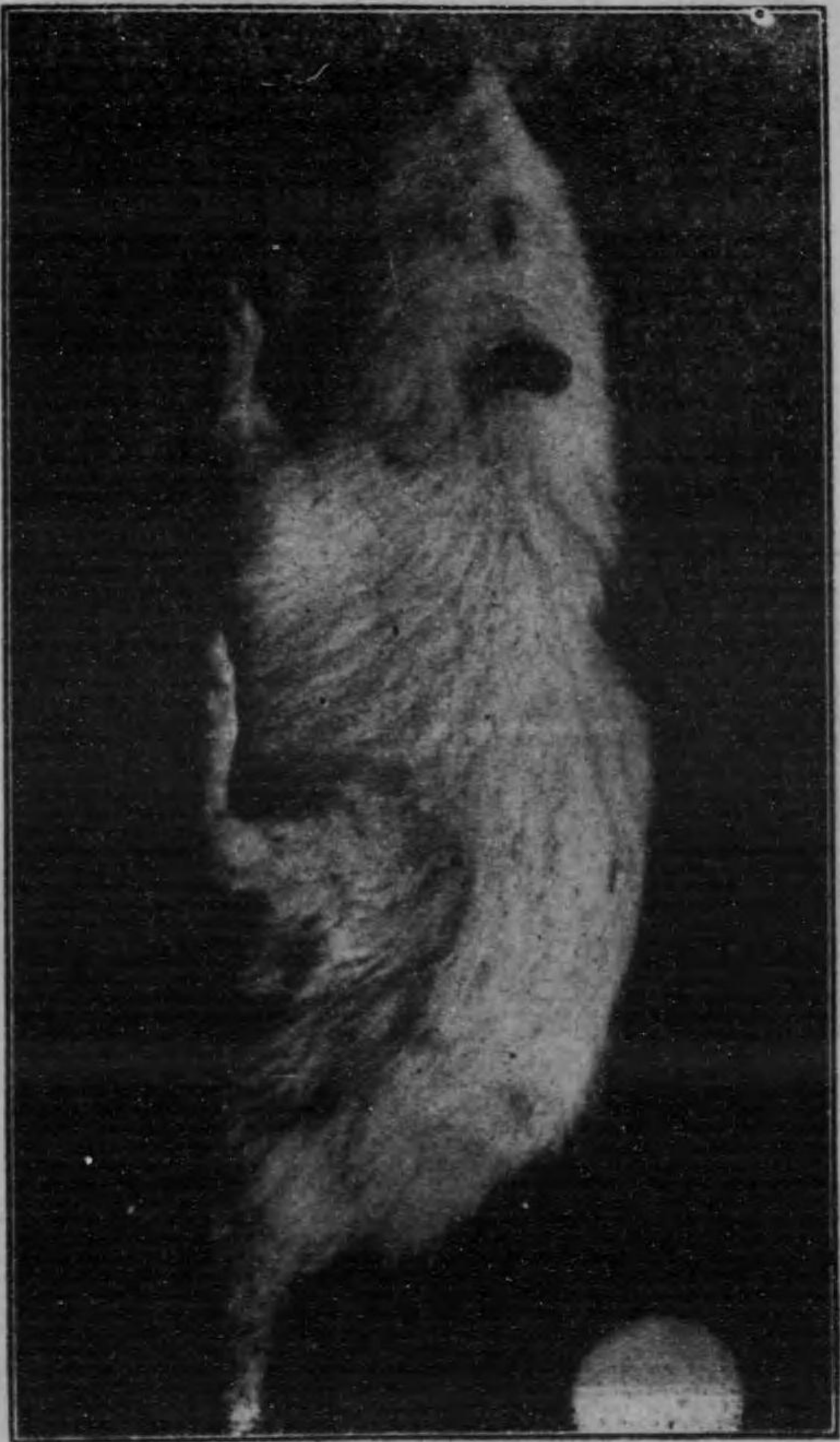
牝を之れに近付くも牝は見向きもせず何等の反應を呈せざりしもの。背部には毛少く、頸及び其の他の場所に毛髪の點々脱落せる所あり、乳房は萎縮し、食欲少く、羸瘦し、運動不活潑にして外界に對して全く無頓着である。一千九百十四年の四月十二日に性欲旺盛にして且つ妊娠せる生後四ヶ月の牝より二個の卵巢を取り、此の老ひたる牝の腹の皮下に移植した。四月の二十五日若き性欲旺盛なる牝を之れに近付けたるに、牝は以前とは頗る趣を異にして此の牝によつて大いに刺戟せられた。即ち牝を抱き且つ交尾を試みた。然し牝は之を拒んだ。四月の二十八日此の牝に對して若き牝は何れも非常に強く昂奮するのを見た。此の牝の膺の入口は、普通の若き交尾慾ある牝と等しくなれるを見た。而して此の牝は今や食欲旺盛となつて、外界に對し頗る好奇心を起せるを見た。五月の六日此の牝は今や交尾慾頗る旺盛となり、膺の入口は開き、若き牝と一緒に置きたるに喜んで之れと交尾した。五月の二十二日まで懷妊の兆候を見ず。然れども乳房は今や著るしく大きくなつ

六六
 た六月九日毛髪少き場所或は脱落せる場所に、再び新しき毛を生じた。動物は生き
 活きし、且つ運動が活潑となり、體重も増加した。六月の二十三日には交尾慾が旺
 盛となつて屢々交尾し、新しき毛並は揃ひ、全く美しくなつた。七月の十三日懷妊
 の兆候一見明瞭となつた。乳房は大きく且つ膨れた。七月の十五日に至つて二十三
 日間の懷妊によつて五匹の子供を産んだ。即ち二十九ヶ月の老齡に於て此の若返り
 たる牝は完全に懷妊し且つ子を産んだのである。斯くの如き事は普通の牝には曾つ
 て見られなかつたことで、此の牝は實に一年以上受胎する事なくして、而して「若
 返り法」によつて斯く受胎し且つ子を産んだのである。八月の二十五日幼兒は十分
 に發育し且つ乳房は十分に成長した。一千九百十五年の二月二十二日、三十六ヶ月
 半の老齡に於て此の牝の鼠は老衰の現象によつて死亡した。即ち此の姉妹にし
 て手術を受けざるものに比して實に入ヶ月間を生き延びたのである。斯く「若返り
 法」によつて老齡に於て子を儲けたるのみならず、尙ほ八ヶ月壽命を延べ得たるも



(前術手)鼠るたし衰老の月々七十二

のもるた經を週四後術手り返若 (二)



第七圖の二

のもるた經を週十後術手り返若 (三)



第七圖の三

鼠の前脚手



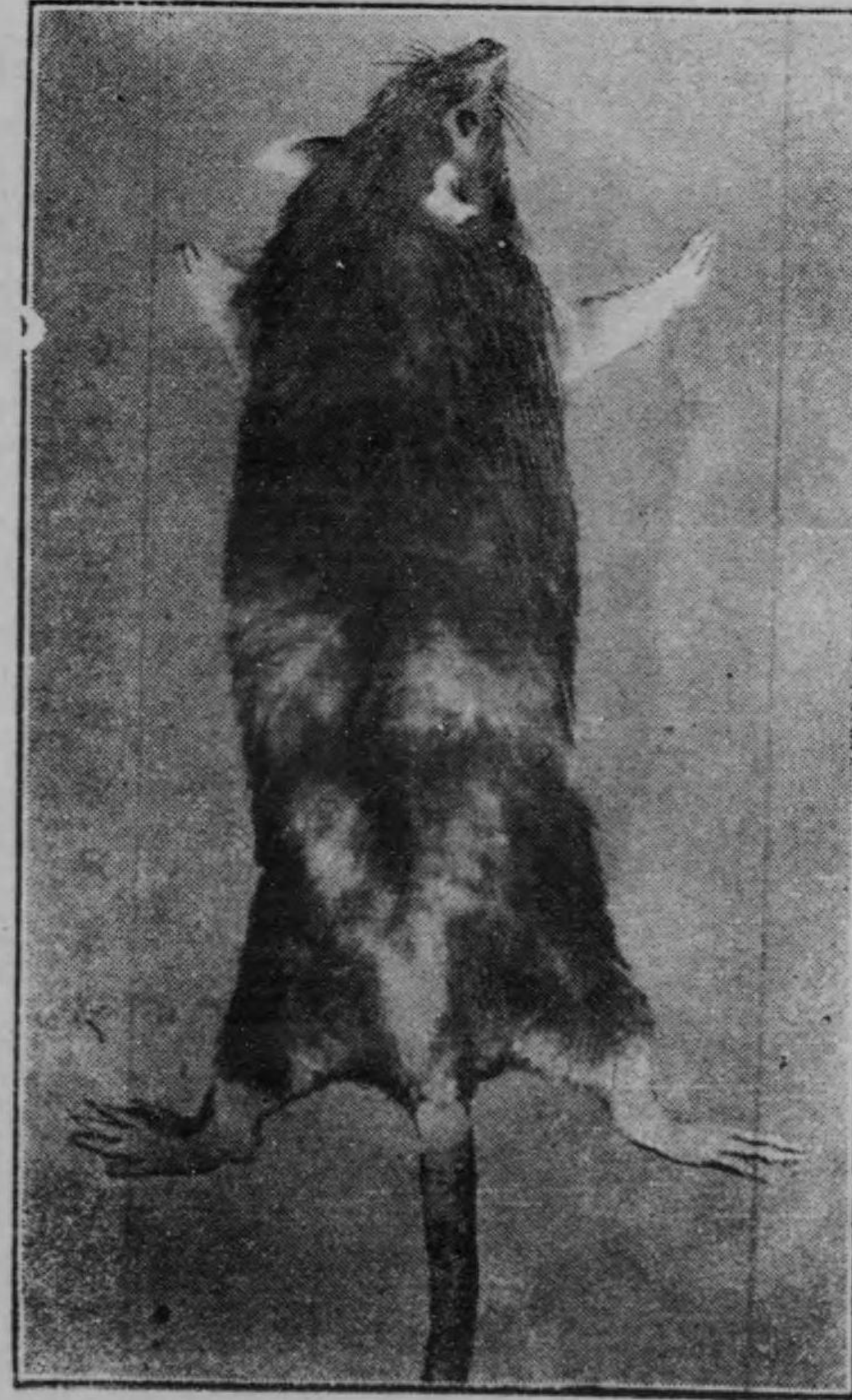
第八圖の一

鼠のもしるたり返若後脚手



第八圖の二

一の圖九第



手術前毛の抜けたるもの

二の圖九第



手術後毛の密生せしもの

のにして、天壽僅々三十ヶ月に満たざる鼠に取つては、此の八ヶ月の延命は非常なる長壽と云はざるを得ない。(第四、五圖参照)

◎人類若返り法の實驗

動物の實驗に就ては前述せる如く、此の簡單なる手術が如何に「若返り法」として有効であるかを確かめたのである。吾人は最も深く知らんと欲する所は此の動物によつて確かめられる効果が果して人間にも應用して同じ様に有効であるか否かと云ふ點である、左記の實驗例はスタインナツハ氏が外科専門醫たるリヒテンステルンの手を假りて人體に若返り手術をして、鼠に於ての若返り法と同じく顯著なる効果を奏することを確かめ得た、但し暗示作用があると精神的に若返るのだと云ふ様な攻撃を避ける爲めに手術を受ける人には全然如何なる手術をするかと云ふ事を知らせないで若返り手術を行なつたのである、それは翠丸の疾患で診察に來たものを、その翠丸の病氣を治

療する序でに内證で若返りの手術を行つて、其経過を見て居たのである。即ち一千九百十八年より一千九百二十年の間三年間に亘りて人間に施したものの、内から三例だけの模範的記録を東大永井教授によりて引用せられたるものを掲ぐ。

(第一例)

早老者。此の者は一労働者にして一般の心身衰弱元氣阻喪、且つ陰囊の痛みを惹へて病院を訪ねて來た。年齢四十四才。體格偉大、然れども羸瘦して着服のまゝ量るも僅かに五十七キログラム(一キログラムは我が二百六十六匁)に過ぎず。筋肉薄弱、皺多き老人染みたる顔貌を具へ、労働に堪えない。性慾は數年來全く缺乏。勢力も亦消滅した。

陰囊の痛みは兩側の陰囊水腫に基けるを以つて、局所麻睡の下に之れを手術した。(一千九百十八年の十一月一日。)其の序でを以つて兩側の輸精管を結紮した。八日の後第一期癒合によつて傷は癒え、其の後間もなく退院した。

二三ヶ月の後其の體重は著るしく増加し、顔面の皺は消失し、四五ヶ月の後筋力は著るしく増加し、百キログラムの物を負ふて容易く仕事する事が出来るやうになり筋肉殊に手脚の筋肉は著るしく充實した。性慾が新に目覺め、一旦消滅したる勢力は再び壯時の如く旺盛となり、一週間約三四回の性交を必要とする程度に達した。毛髮殊に耻毛が夥しく新生し、頭腦髻なども密となり、毛の伸びる事も亦早くなつた。結紮後一年にして體重の増加は實に十二キログラムに達した。而かも大戦時に於て殊に下層労働者の食事の如何に貧しきものなるかを考ふる時、此の體重の増加は一層驚異に値する、斯かる良好なる影響は手術後一年半を経たる今日に於ても尙ほ繼續して居る。(體重十二キログラムの増加は我が三貫目以上の増加である)。

(第二例)

七十一の老翁。大企業の指揮者。患者は左側の睪丸潰瘍の爲めに療養所に運ばれた。惡寒發熱ありたるを以て直ちに化膿部の切開を行ひ、即ち局所麻睡の下に全

然左の罌丸を剔出した。(一千九百十九年二月十日) 其の際右側の健康なる罌丸に於て局所麻睡の下に其の輸精管を結紮した。術後二十四時間にして解熱し、三週間の後退院した。

七〇

患者は此の急性疾患の外、數年來顯著なる老衰症状を呈した。就中血管壁が硬化し爲めに腦に於ける血液の循環悪しく、屢々眩暈を起し、呼吸困難・心臟悸動・過度の疲勞・振顫を惹へた。八年以來性慾は全く消滅して居た。

術後三四ヶ月にして驚くべき心身の變化を呈した。久しく失はれて居た男性的元氣は恢復した。而かも其の恢復は一時的のものに非ず。術後九ヶ月の後リヒテンスタルン氏が此の患者を呼寄せ、術後の経過を有りの儘に記載せしめたる所のものは次の通である。

「私は手術の傷が癒えた後に轉地療養を試みた。其處で私は大いなる驚を以つて、性慾に關する夢を見た。さうして遺精を起した。私の食慾は非常なる程度に高まつ

た。到底此の戦時の制限せられたる分量では満足が出来ない。以前は精神状態が極めて沈鬱であつたが、今や全く爽快になつた。私の様子は再び若々しくなり、人は私を見て精々六十前後にしか見えなると云ふ。以前私は少しでも早く歩むか、或は緩い坂道でも登ると、苦しくなり、殊に呼吸困難を感じたのであるが、今や全く其の氣道ひはなくなつた。私は一時間でも徒歩して毫しも苦しいとは思はない。以前起つた眩暈は今極めて僅かになつた。即ち九ヶ月間に僅に一度しか起らなかつた。要するに私は今や老の年波の至つた事を全く忘れて居る、私は私の壯年に於けると全く同様に、書くことも話すことを考ふることも自由になつた。私の身體が元氣よくなつた兆候の一つは、私の髪の毛の伸び方がよくなつた事で、以前には二三週間毎に理髪店に行つたものが、今は毎週行かねばならぬやうになつた。終りに臨んで私は今一度私の性慾生活について繰返して置く。即ち今や絶えず性慾に關する夢を見、其の興奮が終ひに私をして自然の満足を買ふべく決心せしめた。さうして私が

七一

引續き、體重は今や六十キログラムに快復した。

以上の記録は大正九年の四月に公表されたるスタインナツハ博士の實驗報告である。スタインナツハ博士はウキーン大學教授で、且つ其の學士院の生物學研究所の長である。而して前に述べたるやうに、此の問題に關しては既に十年一日の如く研究を繼續して、非常に價値ある數多の業績を發表した人である。而して此の報告は慎重なる上にも慎重なる態度を取つて公にしたものである。して見れば其の學說の根據ある事、其の發表者の權威ある事から考へて、吾等は此の新しき「若返り法」に對して如何なる希望と注意とを拂ふべきであらうか。(中略)若し夫れ、人間が、幾千萬年かの間覺めて、然かも毎に失望に終はつた所のものが、今にして始めて與へられたとしたならば、是は實に人間生活に於ける一大革命である。吾等生命の自然科學的研究に關係して居るものは、之を追驗し、之を批判し、一日も早く其の眞價を明かにするの責任を感じつゝ、茲に此の新「若返り法」の生理的根據を世に紹介する。(完)

左に掲載せるものは回春堂病院に於て、男女若返り手術を施せる患者五百有餘名中簡單に數例を抄録す。

徳川三百年の鎖國隱蔽主義は政治に外交に一家内に個人に傳統し、政治は隱蔽を事とし外交は秘密主義を遵び個人も亦是れを事とし醫師に對してすら疾患の症候を隱蔽せんとする者多し、況んや全治後の報告を赤裸々に語るが如きは頗る稀なり、自己が手を出して専心治療せし患者も一旦病癒えて醫師の許を去るや忽ち查として消息を絶つを以て其後の経過如何を知ること能はざるを普通とす。斯くては其の疾患の種類と性質に依りて相當期間に亘る統計的研究を積む事難く之に對する學術上並に技術上の進歩改良を討究する上に於て多くの不便を有するや論を俟たざる所なり。反之偶々全治の永引くものあらんか苦言百出醫師を攻むる頗る急なり、歐米人を見よ、如何に彼等は自ら進んで、而かも私財を鄭つてまでも、學術進歩の爲め牽いては社會人類の幸福増進の爲めに

自己の體験を報告せんと務むるかを。
美しき社會奉仕の念と公德心と研究心に缺けたる多くの日本人は省るの要なきや？。

余は過去殆ど一ケ年間の手術患者壹千人に及べるが茲に斷言す、百發百中
症狀の快方に向はざる人なしと。唯々壹千人の患者中三人の例外あれ共其理
由は章を改めて述べんと欲す、余は斯る公德心なき我國に於て余の治療を受け
し多くの患者中歸宅の後に於ても進んで是れが報告の勞を取てせられたる諸士
に對して衷心感謝の意を表する者也。

第一例 静岡市西草深町 茶業 清水幸次郎殿 五十六才

本例は文意簡單明瞭にして、患者の報告文として模範的のものなれば、報告書
の一文一句を訂正せず掲載せり（但し前文及び末尾は省略せり）。
清水氏は、本若返り法は社會人類の爲め邦家の爲めなりとて熱心に宣傳せられ

居れり。茲に同氏に對して感謝の意を表し併せて永久に健在邦家の爲め努力奮
勵せられん事を祈る。

於駿河臺 回春堂 山尾清實

既往症。清水氏は花柳の巷に出入せし事なきが故に花柳病の疾患なし、本患者は銀
行家にして性來非常の神經家たりしが明治三十七八年頃業務上神經過勞の爲め極度の
神經衰弱に罹り種々複雑なる神經衰弱の全症候を具備す、就中意識不明なるが如き行
動を取りたり、即ち銀行へ出勤すべく家を出でたるも其銀行を忘るゝが如き又、夜中
は殆ど睡眠する事能はず、身體は衰弱し、夢精、遺精等あり、種々醫藥を服用するも
何等其効果なかりし、一家の經濟等考慮すべき暇なく斷然銀行を辭し、細事には絶對
に頭腦を使はず、精神の安靜を旨としたるに症狀稍良好となるも、陰萎に陥り、夢
精、遺精に苦しむと共に神經衰弱の症候依然たり、家計の都合上現在の業務たる茶業
組合に出勤する事となれり、其後引續き種々の療法を施せるも絶えて効なし。

大正十年三月二十六日輸精管の一例を山尾式によりて手術す、即日汽車にて歸郷せらる。

第一回報告

拜啓陳者其後御無沙汰に相成奉謝候、毎日繃帯取換に當地外科醫院に參り候處明日半分後日半分宛糸を引き抜き申候由に有之候、扱て其後の経過に付左記の通り御報告申上候間御承引被下度候先は右御通知迄 敬具

第一回報告(手術後七日目)

●體重 十一貫六百五十目(手術時十一貫二百匁。四百五十匁の増)
●精神作用 是れ迄氣に掛る事も氣にせざる様相成候
●睡眠 夜分も能く安眠出來候(今迄は一旦夜中に目醒むれば中々寢入る事六ヶ敷きも)短時間にして安眠せり。
●生殖器に關する件 今迄軟弱なりしが二三日前より護謨質の如き弾力ある状態とな

れり從て幾分勃起力を有するが如し、此経過によれば一週間を出でずして勃起するならんと思考致候

●握力 は本日醫師の許に參り試験の上報告可申上候
●尚頭髮視力は追て御報告申上候(大正十年四月一日)

第二回報告

拜啓陳者四月一日付にて第一回報告書差出置候處其の内生殖器に係はる分は更に變化有之候間御報告申上候(四月三日)

●生殖器に關するの件 前回報告には軟弱なりしも護謨質の如き弾力を有するが如き状態にして今後一週間日を出でずして勃起するならんと思ふにありしが今朝に至り(前報告後三日目)勃起致候然しながら勃起力薄弱なりしも今後不日にして勃起力普通となるならん、尙糸は昨日にて全部引き抜き申候最早交接差支なきものなるや御返事の勞を煩し度願上候

第三回報告

拜啓益々御多祥奉賀候小生事御蔭様を以て神経の衰弱も日に快方に向ひ誠に難有
奉存候扱て其後の経過左記の通に御座候間此段御報告申上候 早々敬具

體重 十一貫六百五十匁 前回同様増減なし

睡眠 前回通 矢張安眠致候

生殖器 自己體力に相應したる勃起力を有する様に相成候事と存候

握力 右四十五、左三十五にして手術を受けし時に比し右十五、左七ツの増加なり

視力 保利醫學博士の編纂に係る視力表第三號により試験をなしたる結果は六メー

トルの處にて五メートルは判明すれども四メートルは不明なり参考までに左に引
き寫し致置候(視力表迄寫し送られたるも略す)

第四回報告

拜啓陳者益々御多祥奉賀候扱て其後の経過左記の通りに有之候此段御報告申上候也

體重 前回と同様増減なし

神経作用 益々良好に候

生殖器 益々良ろし

握力 右は前回同様、左は四十と相成五ツの増加なり

視力 前回申上候には六メートルの處にて四メートル不明なりしも本日は四メー

トルに判明せり

睡眠 は前回報告と同様安眠出來候

尙此頃(兩三日前より)食慾出で毎食稍や一杯位づゝ餘分に食し申候(四月十五日)

第五回報告

拜啓陳者益々御多祥奉賀候扱て先回(四月十五日付)御報告申上候通り總て異動無之
候視力は此の六メートルにて四メートル判明に付き今回は八メートルにて試験致候
處六メートル不明に有之候先は右まで 草々敬具(大正十年四月二十五日)

第六回報告

拜啓陳者先月二十五日第五回報告後昨日に至る迄變化無之候處今朝に至り少しく變動有之候間左に御報告申上候

- 體重 十一貫九百目(前回より三百目増)
- 精神作用 益々良好に相成候
- 睡眠 夜中安眠出來候
- 生殖器 後門引締ると同時に生殖器の引締る事一日の中に何回なるや數を知らざる程に有之候
- 握力 前回と同様に有之候
- 頭髮の伸長 に就ては目下試験中にて報告する程の變化を示さず候
- 視力 は前回同様有之候(五月二十日)

◎醫員小林喜一君偶々用務の爲め静岡市に宿し清水氏を訪ふ(六月六日)

「此頃になりて生殖器勢力益々旺盛にして七八年來殆ど覺えなき事にして夜中目覺る時と雖も勢力頻々たるも驚くべし、未だ一回も實行せずと、如何となれば折角の恩澤に浴しながら又病症の増悪するを恐る爲めなりと、手術後夢精等は絶対に無く精神状態日々に快活となり雜務多忙なるに係はらず何の考慮もなく従事しつゝ、あり身體も肥りて施術前まではカラーと頭の間に二本の指の入りて餘裕ありたるも今日にては頭の苦しきを覺ゆる程なり、食慾も進み過ぎて今日にては胃の害するを恐れて扣へ氣味に食物を攝取し居れり尙七八年來殆ど醫師にも見離され自己自身すら到底之れが全治の見込なきと斷念せるに偶々若返り大發見の報導を新聞紙上に知り手術を受けたるに永年の難病たる神經衰弱及機能障害は拭ふが如くに消失せり實に感泣の外なしかゝる實際を現在に實驗しつゝ之れを研究せんとする心なき醫師は兎も角、何等研究せず實驗なきに彼是批評するが如きは人類の仇敵なり」と清水氏は以上の如く双眼に涙を浮べて語られたり。生も亦感慨胸に迫まり涙滂沱と

して下る。(小林記)

第二例 東京市京橋區築地 官吏 吉川殿 四十三才

四五年以來急に元氣衰へ、神經衰弱症候あり、三年前鈴木胃腸病院に至り胃弛緩症なりとの診断にて治療を受くること二ヶ月、一時大に快方に向へるも職務上地方へ轉勤の爲め治療を中止せり。其他に記すべき著患なきも生來體質薄弱なるを免かれず而して本症は昨年春以來原因なく再び急速に症状増悪し、全身倦怠を感じ、夜間雜夢の爲め熟睡すること能はず、屢々暈眩を起し、頭重く逆上し、生殖器は全く勢力なきにあらざるも殆んど無勢力にして偶々不充分に之を實行するも、爲めに全身の不調和を來し氣分悪しくなる云々。

診断(胃の障害より起る神經衰弱症)。依つて余は患者に告ぐるに胃腸の強健法に兼ねて神經衰弱症を治する旨を以てせり。

體重十一貫七百日 握力右二十五、左二十四 視力普通。

大正十年一月九日スタインナツハ手術式により右側の輸精管を結紮す、通院を命じ毎日繃帶交換に來らしめ、六日間にして第一期癒合にて創面全治す。毎三日目位に來り補助療法として翠丸エキスを注射を行ふことを約す。手術後十日目に來院し、氣分の稍爽也となれることを語り、生殖器勢力も俄かに昂まりたるを告ぐ、試みに體重、握力を量るに、體重に於て二百目を減じ、筋力(握力)に於て、右二キロ、左二キロを増加す。翠丸エキスを注射を行ひ歸宅せしむ。爾來毎三日目に注射の爲め來院せしも余自身診察するの機會なかりしが二月十一日(手術後二十五日)親しく診察するに體重十二貫五百目(手術時より八百目増加)握力右三十、左二十七(手術當時に比し右五キロ左三キロの増加)。

元來患者は手術以前には顔面蒼白、意氣頗る消沈、鬱憂性顔貞にして、言語不明瞭なりしが、現時に在りては頗る顔貞生氣を帯び、屈みたる腰は伸び、姿勢眞直となり。本人曰く、「余は元來蒲柳の體質なるも、壯年時代にありては意氣敢て人後に下

八六
らず胞負亦遠大にして生氣溢るゝが如き性格なりしが、天然の體質には抵抗し難く、一言にして云へば早老の症候ありしが、今や生の力と勇氣とを得たる確信あり。此の調子を以て進まば將來吾が希望をも達することを得べし」云々。

五月二十七日(手術後約四ヶ月半)来院せられて曰く、「爾來旅行中にて御無沙汰せり。其後體重を度々量るも約二百目の増加に過ぎざるも元氣は益々旺盛にして、生殖器勢力昂奮し、心身共に全く三十前後の壯者と異ならざるを覺ゆ」と。握力を量るに驚くべし右四十一、左四十にして、殆んど筋力に於て二倍の増加を見たり。
從來多くの患者を見るに何れも先づ腕力と生殖器の勢力の増加を來し、續いて漸次全身を強壯ならしむるものなり。體重の増加は徐々に来り、毛髪の伸る力は比較的後るゝが如し。

第三例 北海道函館區千代ヶ岱 勝○良○郎殿 銀行員 四十八歳

主訴。中學二三年生頃より自瀆の惡習を覺え屢々反覆實行したる結果中學卒業頃猛

烈なる不眠症に罹り記憶力頓に減退す。卒業後二ケ年間所々に轉地療養を試み其の間岡田式靜座法、藤田式息心調和術等を研究實行し傍ら冷水摩擦等を併用したる爲め半ば健康を恢復したるに依り○高等商業學校に入學して専心勉強中再び神經衰弱増悪し頭痛耳鳴り等甚だしく遺精夢精頻々たるに依り第二學年の時斷然意を決して退學す。三十二歳の時結婚し其後現在の銀行に勤務中なるも近來又々憂鬱症に侵され無勞力となり思想の統一を缺き思考力なく、決斷力に乏しく小事に心配し日常業務に何等の興味をも感せず。就中不眠症に苦む。

診斷。生殖器機能障害より來る腦神經衰弱一般症狀は。筋骨薄弱。貧血。過敏性顔良。體重十二貫三百目。視力、普通。握力、右二十九 左二十五。

二月十八日、即ち初診の翌日、山尾式改良若返り手術式に依りて右方輸精管の結紮をなす。患者は附近の旅館に滞在中に付き毎日繃帶交換に來らしむ。施術後七日目に抜糸す。上京を機會に全治後も東京見物の爲滞在中に手術後二週間目に於て安眠の

出來得る様になり自然的に軽度の局部勃起を來せりとて來院す。即ち本手術の効果の顯現は個人の體質、年齢、疾患の種類に依りて夫れ々々差異あることを多くの實例を擧げて説明せしに、大いに喜びて歸宅せり。其翌日余に暇を告げて郷里北海道に向つて歸省せしが、其後の報告に依れば手術後一ヶ月目にして、體量に於て二百匁の増量を見、握力右三十二、左三十、となり、二ヶ月目に於て體重二百八十匁、握力右三十七、左三十二となり、何となく元氣も出で、事物を氣にせざる様になり、思想の統一も出來、業務にも執着心を有するに至り歩行通勤にも疲勞を感ずること無きに至りたり。最近遺精全く無しと。

第四例 富山縣高岡市末廣町 醫師 堀 勝二殿

本老人は、回春堂病院に於て開催せる、若返り手術講習會第一回會員として劈頭第一番に申込み第一番に上京せられし人なり。氏は本講習會開催の儀發表せらるゝや、性來の研究心止み難く、醫師の立場として、一は學術界の爲め、又一つは

萬民の幸福の爲め、先づ自ら其の身を犠牲に供して手術を受け、以て若返り手術の眞價如何を實驗せんと欲し、出發に先ちて親戚知己と送別の宴を張りて上京せり。余即ち氏を招じて會見せるに、體軀堂々たる偉丈夫にして、熾烈なる熱情を有すると同時に、又一方、言々冷靜なる理智と批判とを失はず。一見、研究心に富めることを推知せらる。而かも白鬚霜の如し。聞く所に依れば、氏は嘗て高岡市に初めて自轉車を紹介し、自ら之れに乗り、以て文明の利器を應用するの範を示し、又醫師として我國最初に飛行機に乗りたるも亦氏なり。(余も亦、若返り法の學理的並に實驗的に有效なる事を確かめつゝ、未だ自ら手術を受けざりしを思ひ、即ち自から刀を執つて、自身の身體に手術したり。此點に於て、稍々堀氏と對抗したりといはむか、前述の如く氏は人間の疾患を癒し幸福を増進すべき醫師として、犠牲的精神を以て上京せられたるものなれば、余が講習會に於て、醫師にして若返り手術を受けたる第一人者なり。問時にまた講習生として先づ患者に手術せる嚆矢なり。氏は講習會終了後、郷里に歸

りて再び親戚知己を招ぎて祝賀の宴を開きて、其の體験を報告せり。富山地方の新聞紙は先を争つて此の老人、否、苦き新人の記事を掲載したり。君返り手術を受けたる氏の経過左の如し。

左に堀氏よりの來狀を援萃す。

(前略) 小生も手術の効果めき々顯はれ、體重は五百匁増加仕り、髪も黒くなる様にて、元氣は益々盛んに、**■**は大満足の態に御座候、狩獵は壯年時代小生の最も好む所なりしが、過去十數年間體力及ばず中止罷在候ひしも、本年は狩獵季に入らば、久し振りにて、獵銃を肩に山野を援抄して、大いに活動仕度、今より樂し居申候當地にて、小生の實例を見て君返り法は各方面に於て歡迎せられ居候様子に付、小生も手術實施致度候間何卒御援助の程奉希上候。(後略) 第二、第三、の報告は本文締切迄の間に合はざりしに依り何れ改版の際に増補すべし。

大正十年十月一日印刷
大正十年十月四日發行

定價金七十錢

著作者 山尾清實

發行兼印刷者 小林喜一

印刷所 東京市京橋區築地一ノ一九
中山爲吉



東京市赤坂區青山南町五丁目九十七番地

發行所 性愛社

終

